
里丘朋日の非日常

南杜憂狩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

里丘朋日の非日常

【Nコード】

N6293E

【作者名】

南杜憂狩

【あらすじ】

あることをきっかけに普通的女子高生として過ごす朋日。平穏な日々はふとした拍子に思いがけない方向へと転がっていく。

【0 転機】

「いやだ！」

提案は即座に『拒否』という形で却下された。

「駄々こねるなよ。仕方ないだろ？ 腕の骨がいかれちまってんだゾ。そんな腕でどうしようってんだ。それに、今年がダメでもまた来年がある」

肩に置かれた手を払いのけ、自由にならない腕を忌々しいまいまそうに睨にらみつけた。

「来年？ そんなこと、本気で言ってるの」

「俺達のやってる事が危険と隣り合わせだってのはわかってることだ。それだって自分の不注意が原因でやっちまったってんなら、自業自得だろうが」

あまりに反論の余地がないその言い様に、ままならない現実には立ちが募る。

「わかってるよ！ わかってるけど。……そう簡単に気持ちを切り替えるなんて、出来無いよ！」

激情のまま手袋を叩きつけ出て行く後姿に、男はやれやれと溜め息をついた。

あの頑固さは一体誰に似たのか。

タイヤの焦げた匂いと耳慣れたエンジン音。

空気よりも体に馴染んだそれを肌で感じながら、独りサーキット横のベンチにだらしなく凭もたれかかる。

空を見上げ、流れる雲をみていた。

想い浮かぶのは初めてグリップを握った時のこと。

軽くスロットルを回したときの感動。体を震わせているのが興奮からか、緊張からか、それとも歓喜からくるものかはしなかった。いや、全てだったのだろう。

あの時から世界が変わった。
自分の居場所を見つけた。

そして、それがいつしか当たり前のことになった。
まさか、こんな風に、走れなくなる日が来るなんて、思いもしなかった。

真っ青な青空に薄い雲が浮かんでいる。

風が強いせいか雲の形が変わるのが速い。

ベンチの端に腰掛、右腕は力なく体の横に垂らしている。

いつもは軽い腕が、今はやけに重い。肩から手首まで固められた石膏は動物園の檻おりに似ている。

—— 走りたい

ただ一つの欲求を、奪われてしまった。
違う。

奪ったのは自分だ。

練習中のミステイク。

ほんの些細なミスささいが命取りになる。

理解していたはずなのに、ミスを犯してしまったのは自分自身。
目の奥が熱い。

走っていなければ、走れなければ、生きている意味はない。

この場所を離れたくはないのに、走れなければここにすることが
辛い。なんて不毛なジレンマ。

そして、苦渋の決断の時。

この腕が治るまで。

もう一度、走れるようになるまで。

それまでは…。

「…あの話、考えてみた。…いつまでかなんて、はっきり言えない

けど。行ってみる」

【0 転機】（後書き）

少しだけ加筆しました。

【1 出会い】（前書き）

藤森との出会い。彼と出会ってから里丘の平穏な日々が変化していく。

【1 出会い】

腰まで有りそうな長い髪を無造作に一つに束ね、図書室の中でも奥まった場所にある閲覧席に彼女はいた。

空調の聞いた室内は、寒くなりはじめた外気を感じさせることはなかった。

読書の秋とはよくいったもので、図書室は結構な賑わいを見せていた。

しかし、放課後の図書室は閑散としていて、常連ばかりが顔を並べる。

「ここ、あいてる？」

突然の来訪者は広々とした席を選ばず、何故か前後を書架に挟まれた彼女・里丘の前に陣取る。

自習時間には人気の席だが、放課後ともなると里丘の特等席へと変わる。

「どうぞ」

どけというなら話しは別だが、向かいの席くらい好きだけ使ってくれとばかりに顔も上げずに返す。

「… x が… y は？ ああ、 x の二乗がこっちへ移項するのか、で y イコール。なるほどね」

しばらく中学時の数学をふむふむと頷き解いていた里丘だが、向かいから飛んでくる視線に気付き頭を上げた。

「あ、ごめん。煩い？」

いつの間にやらでていた独り言に機嫌でも悪くしたのかと思いきや、謝る。

「いや、それって課題？」

ノートを指差し尋ねてくる。

「ただの趣味。好きなんだ、計算問題って」

「変わってるっていわれない」

「そんなの気にしない」

別に人の目など気にしない。『言いたいヤツには言わせておけ』
というのは兄の口癖だ。

ガラツとドアが開く音につられて目を向ける。

長身のその人は脇に雑誌を抱えて入ってきた。

人目をひくのはその身長だけが理由ではないことが遠目にもわかる。

「知ってる？」

「うん、かつこいーね。思わない？」

じろじろと不躰^{ぶしつけ}なくらい眺めておいて、質問に質問でこたえる。

「…俺、男なんだけど」

その質問は普通、男にはしないんじゃないか、と声が語っていた。
「見れば分かる」

「……」

あっけらかんと返ってきた言葉に、言葉をなくす。

そこで説明不足だったことに気付き里丘が言葉を付け足した。

「格好がいいっていったんだよ。なんていうか、スタイル」

首をひねる。

「体型？」

「違う、かな。形もいいんだけど、動きとかいろいろ。その人の色
みたいなものかな」

ああ、なるほど、と手を打つ。

「俺は？」

苦笑して、向かいに座る相手に本日初めてまともに目を向ける。

「どうだろう。目に留まったものにしか、興味がいかないとこある
から。いい男だとは思っよ」

聞きよつによつては失礼だと思っ言葉をさらりと伝える。

それ以上でも、それ以下でもない。

「数学好きなの？」

気を悪くした様子もなく、再び里丘の手元に視線を移してくる。

「まあね」

「得意なんだ？」

「そうでもないよ。計算問題は好き、文章問題は嫌い。現国の文章問題は好きだけど」

「どちらも文章問題に変わりはないんじゃない？と素朴な疑問が浮かぶ。どこか違う？」

「現国は本を読むのが好きだから苦にならない。けど、数学の文章は何を言っているのかわからない。答えはでるんだけど、それを式に表わすのが苦手」

「答えはでるんだ？」

そんなことがあるのかと目を丸くする相手に、質問で返す。

「そういうことない？ 読んでるうちに答えはこれだ、っていうこと」

「ない」

即答されるが、事実が事実。

「多分頭の中で式を組み立ててるんだとは思っただけど、いざ、書こうとすると消えていく感じ。だから、答えだけが頭に残ってんじゃないかと思うんだよね」

「へー、すごいな」

感心されても困る。特別なことじゃない。

「答えだけ残ってても仕方ないんだけどね」

「どうして」

「点数にはならない」

そう、式がなければ答えが出ていても何の意味もなさない。答えよりも過程が大事。

「それは確かに」

納得気に頷くその人に、こんな話を真面目にしているのが可笑しくなる。

「面白い人だね。名前は？」

学年章が同じ学年だということは教えてくれていたけれど、名札

はないので尋ねる。名前を知らなければ呼ぶとき不便だ。

「藤森 怜^{ふじもり さとし}」

聞き覚えがない。

里丘にしてみれば他のクラスの間とは関わりようがない上、興味もないので余程のことがない限り名前など覚えもしないというのが現実なのだが。

「藤森、いい名前だね」

紫色の鈴なり状に咲く花が里丘の頭にイメージとなって浮かぶ。

「どこにでもある名前だろ」

「そうかな？ 私の周りにはいないな。藤の花って好きなんだ。よくカンザシとかであるじゃない？ あれが小さいとき欲しくって」
七五三の時、そのカンザシをしている子を見て駄々をこねた里丘に兄がどこからかその花を持ってきて頭に飾ってくれた。

なぜかおでこに紫のしみがのこり、おもっていたよりずっと頭に重かった。

後からわかったことだが、あれは藤の花ではなかったらしい…。

「あゝ、あれね」

知っているのか相槌^{あいづち}を打つ。

「そう、あれ」

「俺んちあるよその花、母親が好きで道路沿いの庭にびっしりと手振りを交えて話す。」

「藤棚あるんだ。見頃っていつ？」

「4月から5月辺りかな。そうそう、帰った途端鮮やかな葡萄にみえたことがあった」

里丘の頭の中で藤の花のイメージが葡萄に化ける。うっとりと空をみつめ、つぶやいた。

「葡萄かあ、いいなー」

葡萄をちぎる妄想に耽りそうになり、慌てて頭を振る。

「なにしにきたの？」

図書室には別の目的で来たのだろうに、こんな話をしている

のか。

「今更そこに戻るか？ 読書」

藤森が苦笑して答える。手には確かに本を持っているが進んだ様子はない。

「邪魔した？」

「全然。元々、俺が話しかけたんだし」

「そっか」

安心して胸をなで下ろすと、正面でぶつと藤森が吹きだした。

「里丘ってへんなやつ」

けらけらと笑っている。

里丘は気分を害した様子もなく、藤森をみた。

「十人十色っていうじゃない。私が変に見えるのは、藤森の尺度で私を計ってるからよ」

「それはいえてる。でも、俺は普通だよ」

「私もね」

「自分のこと変だなんていうやつはいねーか」

「そういうこと」

問題は解決したようだ。

「あれ？」

そつえば、と首を捻る。

「名前教えたっけ？」

何気なく名前を呼ばれてスルーしてしまったが、まだ名乗ってはいなかったことに気付く。

「いや、でも里丘目立つし」

「目立ってる？」

「ん、ああ。まあ、なんていうかいろんな意味で」

「ふん」

追究する気はないのか曖昧に相槌を打つ。

「ん」

里丘がふと何かに気付き顔を上げた。

つられて藤森も天井を見上げる。

図書室で音楽がかかるのは、一日に二度だ。

開館と閉館の時間。時計に目を走らせると、長針と短針がまっすぐになっている。

「そろそろ閉館だ。今日は楽しかった。じゃ」

「また来てもいいかな」

さっさと荷物をまとめ始めた里丘に藤森が尋ねる。

「どうぞどうぞ、学校の図書館だ、誰もダメとはいわないよ」

【1 出会い】（後書き）

修正しました。

藤の花が何月に咲くか、知らなかったんです。（――；）

【2 二日目】（前書き）

里丘の意外（？）な一面が顔を覗かせる。やっぱり入って、話してみないとわからねえ（藤森談）

【2 二日目】

翌日も姿を現した藤森と軽く挨拶を交わして雑誌を開いた。

無意識にくるりとペンを回しカツカツと机をならす。考え事をする時の癖がどうしても出てしまう。

「本当に来たんだ」

雑誌からは顔を上げずに話し掛けた。

「あれ？ 嘘だと思った」

里丘の言葉に、信じてなかった？ と眉をあげる。そんな藤森に里丘が目だけを上げて意外そうに言った。

「じゃなくて、……社交辞令かな、と」

結局、信じてなかったということだろう。

「ひっでー」

「普通、思わない？」

所詮、口約束なんてそんな程度。第一、約束だなんてだいそれたものでもない。

「まあ、思わないこともないか。今日はナニ？」

上着を脱いで椅子にかけると、ノートではなく雑誌を開いている里丘に尋ねる。

「クロスワード」

「数学はやらないんだ？」

放課後、図書室にやってきてまでしているのだ。余程好きなんだろうと思っていたのだが、そんなものに興味はないとばかりに今日の里丘は雑誌のマスを埋めていく。

それを見て疑問が生じる。

「気が向いたらするけど。今日は気分じゃない」

——気分？

どうしたら六時間も授業を受けていて、更にその後の貴重な解放された時間を数学なんてくそ面白くもないモノを解く気分になると

いつのか。

聞きたい気もするが、気分は気分なのだろうと自分を納得させておく。

理解不能〓考えても無駄〓考えない、という里丘に対する図式が藤森の頭の中では早々と成立していた。

「どんなのやってんの」

「正月になると落ちてる玉は？」

一文を読んでみせるとそれに答えて藤森が首を傾げ少し考える素振りを見せて、浮かんだ言葉を口に出す。

「お年玉」

小学生レベルの、なんだかとんち的要素の多い問題のようだ。

「そういうやつ」

言われて藤森ははたと思いつく。この手のものは小学生の頃にやり尽くしている。

「なぞなぞじゃねーの、それって」

「うーん、実は私もいまそう思ってたところ。あっ」

無造作に表紙を眺めて、里丘が声を上げる。

「なに？」

「なぞなぞクロスワードだった」

がつくしと肩が落ちる。

「気付かなかったのか」

「気付いてたら買ってないって」

オーソドックスなものがしたかったのに。ぶつぶつと悪態つきながらもさらさらとマスを埋めていく。

「意外と抜けてるな」

「意外？」

なにがどう意外と感じるのだろう？

「そんなヘマしそうにないじゃん」

ヘマなんて日常生活の中で数えたらキリがないくらいやっている。
「藤森の中で『私の人物像』ってどんな？」

藤森が一体どんな風に自分の事を捉えているのか気になった。

別に他人が自分のことをどんなふうに思い、感じているのかわかなくてどうでもいいことだけれど、興味はある。

「よくわかんねーけど、特に仲良くしてる友達、っていうか女同士ってけっこうわけわかんねーグループでいるのに、その中にいないわりにクラスで浮いた様子もないなー、とか理数系めちゃうくらい点とってんのに絵はめちゃう下手、とか」

よくも言いにくいことをこうもずけずけとその最中、気になることが入っていた。

「待った」

更に言い募ろうとする藤森を止める。

「絵を見たの？」

雑誌がなぞなぞクロスワードだと気づいたときより遙に暗い顔で尋ねてくる。

「美術室。選択美術だろ、俺もそうだから」

一年次から導入されている選択科目は音楽と美術。人気の高い音楽からどういう基準かは分からないがもれてしまった生徒は強制的に美術へとまわされることになる。ひと月ごとに課題提出のある美術は、苦手な者にとっては苦痛でしかない。提出が遅ればそれだけで成績にも影響してくる。

とはいえ、あんなもの開いて飾っておいた覚えはない。

きつと美術教師が採点の為開いていたのを、ちゃっかり覗いてしまったのだろう。

「…そうか、あれをみたのか。……どうだった」

落ち込んでいるようにも見えるが、感想をききたいらしい。

「どうって、……ふざけた絵を描くヤツだな、どんな男だ？　と思
って名前見たら、里丘だった。で、あれは一体」

なんだったんだ？　と聞くのも憚りかばたくなるほどに首はがっくりと項垂れ、それにも関わらず目だけはしっかりと藤森のほうを見ているものだから、そら恐ろしささえ感じて口を閉ざしてしまう。

——地雷。だったか……

つうーと背中を汗が伝う。

しかし事實は事實、描かれたものは想像力の範疇を超えていた。幾何学的ではないが、うにょんとした茶色い物体が中央に描かれていて、空と覚しき上半分青と、きつと芝生かなにかだろうと思える地面らしき緑が下半分をうめていて、いたづら描きにしても保育園児以下の作品といえるあれを、描いた本人以外の誰が説明できるというのか、知っている人がいれば教えてほしいくらいだ。

「ナニにみえた」

それでも、答えが欲しいのか里丘は見た罰だといわんばかりに尋ねてくる。

「なにつて、」

長いこと考え込んで頭を捻る藤森は、必死にどこかに潜んでいるかもしれない単語を引つ張り出そうと悪戦苦闘中だ。

やっぱりか、と深いいため息を漏らした後、里丘が観念したようにぼそつともらず。

「コタロー」

「ひ、人？」

ひくつと顔がひくつくの止めれないで、それでも正体を確認したいらしい。

一種の恐いもの見たさ的な心理といえないこともないだろう。

「昔、うちで飼ってた犬」

「ぶっ」

盛大に嘔き出した後も、美術室でみたアレを思い出し反芻しているのか小刻みに肩が震えている。

「笑いすぎ」

「いや、まずいだろあれは。腹痛え」

笑いを堪えたせいで腹筋が痛いのか、お腹を抑え目尻には涙さえ浮かべている。

そんな藤森に不貞腐れた様子でぼやく。

「苦手なんだよ、想像して描くのは。どうしても違う物体になる」
うんざりといった表情を隠そうともしない。

「自覚はあるんだ？」

「あるよ」

失礼なヤツだ、自覚なんて腐るほどある。それでもああなるのは、
きつと芸術的センスが欠片もないからに違いはない。

「あれで点数もらえんの？」

痛いところを突かれる。

「…描き直すかっていわれたから、描き直した結果がアレなのに。
努力は認めてもらえなかったらしい。『2-』^{マイナス}だったぞ」

一度目に提出した作品は『ボールと戯れるコタロー（犬）』だった。
作品の説明をした時の啞然とした美術教師の顔がよみがえる。

二度目の作品『芝生に寝そべるコタロー（犬）』を見せたときの
美術教師の反応はげんなりと『ここまで芸術センスの無い生徒は初めてだ』
といわれたことは未だ里丘の耳にこびりついて離れそうもない。

「通知表？」

「うん」

「赤点ぎりぎりじゃねーの」

それどころじゃない、通常5段階評価だが、その中で更に『-』^{マイナス}
『0』、『+』と各段階ごとに細かく3段階評価されている。

提出期限も大幅に遅れて出した里丘の当初の評価は『1+』^{プラス}。プラスは提出したことによる評価。芸術点は加算してもらえなかった。

そして、再度作品を提出したことで1/3のプラス評価をもらい、
2-^{マイナス}。やはり、芸術点は加算してもらえなかった。

授業態度・創作意欲が更に1/3ずつもらえて、やっと2+^{プラス}。

評価が『2』というのは、ある意味『進級はどうしようかねー』
的な先生思考が混ざっている。

進学校では音楽・美術・体育は受験に必要でない限りあまり重要
視されていない感があるが、ココではそれは通用しない。

「切れてた」

「マジ？」

「大マジ」

「まずいじゃん」

「そう、大変まずかった」

腕を組み言いながらも、里丘からはさほど深刻さは感じられない。

「で、どうしたんだ？」

藤森のほうで、自分のことでもないのに余程心配そうにしている。

「模写で点を稼いだ」

あっさりと言種を明かす。

「模写って元絵があつてそれを真似て描くってやつだよな。上手いの？」

「体育館に飾られてるのみたことない？」

かけんさい
「華絢祭か」

春と秋に開催される芸術展だ。

第二体育館に比べて規模の小さい第一体育館に展示される作品は主に美術コース、美術部の物が多く、三分の一くらいは普通科生徒の美術選択者の中から美術教師に選別され選りすぐりの物が集められる祭典だ。

しかし、里丘が描いたらしき絵は抽象画のコーナーにもなかった気がする。なんて、華絢祭を思い出しながら、口には出さないが結構失礼なことを考えている。『抽象画のコーナー』と決めつけているあたり、藤森の里丘の絵に対する評価は酷い。

「うん。春の華絢祭のとき、入り口にでっかい日本画が飾ってあったでしょ」

目玉とも言うべき作品が会場となる第一体育館に展示される。

これは毎年恒例のことで、数年前には現在新進の芸術家・樋渡右京ひわたしの在校時の作品が展示されたこともある。それ以降、業界関係者もお忍びでやってくるというのだから驚きだ。余談だが、1週間程度は一般に開放されているので特に忍んでやってこなくてもすんな

り入れる。

春には油絵などよりも水彩画や水墨画のさらっとしたものが多いのが特徴だ。入り口には看板とも呼べる二メートル近い絵が飾られるのも恒例で、当然美術関係者の目標の一つでもある。

今年は趣向をこらして掛け軸風にしてあったのだが、それが一層日本画を引き立て、相乗効果になっているようだった。

現在も美術棟横の展示室に飾られている。

かひらぎきよかた
「竊木清方のやつだろ」

絵に詳しくないものでも、作品の横には作品名と作者名がしっかりと書かれている。

制作者名はなかったが、一度でもその芸術展に足を運んでいれば嫌でも目に付く代物だ。

「そうそう」

頷く里丘にそれが何の関係があるんだといわんばかりに藤森が聞く。

「あれが何、コピーじゃねえの？」

藤森の言葉に、にんまりと笑い里丘が言う。

「そんなに上手かった」

しっかりと頬色もつややかさを取り戻した里丘に、常人では予想できない大ドンデン返しが待ちうけていたことを知り、ムンクの叫び実写版と化してしまった藤森が悲鳴をあげる。

「ショック！」

「なにがよ？」

「あのぶつちやいくな犬を描いたヤツとあの絵を描いた人物が同一なんて、詐欺じゃねーか」

本当に失礼なやつである。

「…そこまでいう？」

「言わせてくれ」

きっぱりはつきり言われて、里丘がため息つく。

「いいけどね」

そんな対応に藤森が不思議そうに言った。

「里丘ってあんま怒んないよな」

言われて思い出した。

『アンタ鈍いんじゃないの!』

彼女は手にしていた音楽機器を床に叩きつけ、肩を怒らせて部屋を出て行ってしまった。・・・まあ、それはまた別の話。

「結構内心ではふつつつと煮えくり返ってることはあるんだけどさ。沸点が異様に高いんじゃないかっていわれたことがあったな」

何かを思い出している時の癖なのか、斜め上に視線を上げ呟く里丘に、藤森がうむうむとしたり顔で頷く。

「分かる気がする」

妙なところで納得されてしまった。

ああ、でも、と切り返す。

「なにげないことで怒ったりするよ」

「それって、…矛盾してないか？」

「人間なんて矛盾だらけだよ」

「好き嫌いもなさそうだし」

「あるよ。クラスの子の話題に入ってかないのは興味がないから、藤森と話すのは面白いからだよ」

「普通の話したと思うけど」

「こつというのがいい。芸能人の話しなんかして何が楽しいんだか」

「好きな男の話とかは」

「女の子が話してるのを聞くのは、楽しいかな」

「里丘は話さない？」

「特別好きな人もいないしね」

「紀田は？」

尋ねる藤森に訝しげに眉をひそめる。

「？ ああ、彼はスタイルが好きなだけ」

昨日、話題になった人物だということに思い当たり答えを引き出す。

「好みじゃない？」

「どうだろうね、そこまで知らないからわからない」

——じゃあ誰が好きなんだ？

「里丘って、好きなヤツいないの」

「いるよ」

躊躇せず返ってくる答えに疑問は積み重なる。

「誰」

「特定できないから、言えない」

——複数いるのか？

「多情なんだ」

「そういうんじゃないくて、…嫌いな人がそう多くはないから」

「それは好きなヤツいないってことじゃないのか」

視線だけを斜めに上げて、しばし考える。ついつと視線を戻し軽く頷いた。

「そうともいえるかな。藤森は？」

不意に振られて、戸惑う。

「俺？」

「いないの好きな子」

「いる」

「誰？」

矢次早に質問され、何も考えず答えていた。

「飯田」

言つて、『しまった』と思つたがからかわれる心配はなさそうだ。

「可愛い？」

里丘の関心は別の所にあつた。

「知らない？ 体育祭の時、ミスに選ばれた子。可愛いよ」

記憶を辿っているのか一瞬目が彷徨つたがポンと手を鳴らす。

「あの子は可愛いね」

五月半ばに開催された体育祭は、他校とは違った趣向を凝らしているものだった。

体育祭とは名ばかりの、お祭りなのだ。

文化祭と名の付くものがない分、体育祭は派手にやろうといつかから生徒たちの手で改良に改良を加え、今では模擬店や舞台などと言ったものから、果ては謎解き、お化け屋敷、美女美男コンテスト、各種競技全てが大掛かりで三日にまたがってみんなで遊び尽くそうと言う主旨の元に行われている。

その美女美男コンテストでミスに選ばれていた少女たちの顔が鮮明に里丘の脳に映し出される。

突然思いついたように口を開く。

「あれっ、付き合ってる？」

どこをどう推理したらそういう結論に行き着くんだ。

「まさかつ、彼女いたら図書室に一人でなんてこねーよ」

「正論」

「そうそう」

「告らないの」

話の展開が早い。

——もしかして、俺って邪魔？

「……」

ふと湧き上がった疑惑に藤森が黙り込むと全く予想だにしていなかったことを里丘が言い出した。

「もったいないよ、藤森良い線いってるから、付き合ってる子いいならOKじゃない？」

邪魔だとかそういうことでは無いようだ。単に素朴な疑問だったらしい。

「簡単にいくかあ？」

「さあ、どうだろう」

けしかけておいてこの言い種。

「…無責任」

「他人事だもーん」
（どういふ）

関係ない。

男友達でも親身になってくれそんな話題。

女友達に相談したら、相談相手が彼女になるというのも珍しくないケース。

それなのに、里丘のこの『本気で無関心』だというのが伝わってくるのは、きっと。

「里丘の性格が見えてきた」

「そう？」

「面倒くさがり」

「人様の恋愛事に口出す程経験無いからねー。わけわかんないのに巻き込まれるのも面倒だし」

ズバリと言い当てられても平然としている。

やっぱり…。

「おいおい」

「こんなこと言っているとやばいかな」

世間一般では、と前置きしてくる。

「正体ばらすぞ」

「構わないけど、藤森はそういうことしないでしょ」

「信用してる？」

「その位、話してればわかるよ」

「へー、意外と他人のことみてるんだ」

「マンウォッチングは好きだから」

「なにそれ？」

里丘から飛び出した耳慣れない単語に聞き返す。

「観察すんの。対象は誰でもいいんだよね、興味をひかれた人を日常的に観察するだけ」

「ストーリーみたいだな」

楽しそうに後を付け回してる里丘の姿が藤森の脳裏に浮かぶ。

容易に想像できてしまうのが恐い気もする。

「近いものはあるかも。でも、対象に対して観察以上の気持ちを持たないから、結構冷静に観察できて楽しいよ」

否定せずにそれを一度全部飲み込んでから噛み砕いて詳しく説明するのは癖なんだろうか。

ストーカーという偏執的な響きが和らぐようだ。

「いまでも誰か観察してんの？」

「常に二、三人いるかな」

他人に興味がなさそうで、妙なところで探求心を発揮するやつだ。

「クラスの子二人と、あの子」

指さした先に一年と思える女子が目に残る。

「女の子ばかり？」

「可愛い子好きだからね」

そりゃ、女の子は可愛いが……。

「……レズ」

里丘に関しては考えるだけ無駄だと思っているのか、好奇心からくるものなのか疑問は口を突いて出てきてしまった。

瞬間キョトンと目を丸くしたものの、里丘の頬にすぐ笑みが戻ってくる。

「藤森って発想が愉快だね。残念ながらそうじゃなくて、噂のある子と、ここに来る子はチェックしてるっただけ。それに女の子のほうがいんな意味で観察しがいがあるでしょ」

意味なんてあるのか？

本当は本当に女が好きなんじゃないのか？

藤森は自分の考えていることがわからなくなっているようだ。パニックしているのが目に見えてわかる。単純。

「窓際のあの男の子、かなり読むよ、よく見かける。好んで読むのはミステリー。背中を向けて入り口付近にいる子は大抵、雑誌をみてる。外にあるテーブルではいつも女の子が二人で勉強してるし、今日もそろそろ来る頃。ほら」

唐突に話し出した里丘につられるように、目を走らせる。

図書室の入り口のドアはガラス張りになっているところがないのでその外にいる限り存在はわからない。

ガラリとドアが開き二人の女生徒がはいってくる。

「来た」

驚く藤森に里丘は「でしょ」と笑って流す。

「図書室好きな人って好きなんだよね。なんか勝手に『同志』って思える」

「俺も？」

「藤森は何度かみかけたけど基本的にこういう落ち着いた場所って似合わないよ。初めに、この場所に来たときも全然本を読むタイプにはみえなかった（実際読んでいなかった）し。同志というより、『来訪者』って感じかな。飽きたら、いなくなりそう」

「俺がいなくなったら、里丘はどうする？」

深い意味はない。

ただ聞いてみたくなった。

こういう考えをしている人物には未だお目にかかったことがない。

「もう飽きた？」

「いや、例えば」

「変わらないよ、藤森が来ても来なくても私は変わらない」

「そっか」

里丘は変わらない。何故だろう、信用とか信頼とは関係なく、里丘の言葉は信じれると思うのは。

【3 問題勃発】（前書き）

藤森との出会いから約一週間。早くもなにやら不穏な気配が。

【3 問題勃発】

「里丘さん、ちょっといい？」

昼休みが半分過ぎた頃だった。昼食を学食で済ませ、戻った教室で、午後の授業が始まるまで少し寝るか、と机に顔を伏せた里丘に声がかかる。

「はい？」

見慣れぬ女子に呼び出され、ついてきて欲しいと言われる。断る理由もないのでてれてれと後に続く。

連れ出されたのは校舎の裏。上履きのまま出れるので不自由はない。

そこには数人の女生徒たちが集まっていた。剣呑な空気になにとだろう？と首を捻る。

呼びに来た彼女はくると向き直ると開口一番。

「藤森君と付き合ってるの？」

率直でいいが、面識もないのにもう少し話の持って行き方というものがあるだろうに。

思いつつも、心当たりのないことに首を振る。

あっさりと否定されて、用意していた言葉が出せないのか、一同にしらっとした空気が流れた。

「……」

「……」

互いに妙な間ができる。

「いつも一緒にいるじゃない」

そんな空気に負けじと後ろで控えていた女の子が口を開く。

——その為の要員か？

「別に」

いつもといわれるほど引つ付いて回った覚えなどない。

ここ一週間ほど図書室で他愛ない話に不毛な花を咲かせている程

度だ。

「放課後の図書室で一緒にいるのを見た子がいるのよ」

また、別の子が言い募る。

「最近ね。暇なんじゃない」

だからなんだというのだ、藤森の予定なんか知ったことではない。「近づかないでくれる。彼のこと好きな子とかに迷惑でしょ」

何が誰にとつてどう迷惑なのかは知らないし、自分から近づいた覚えもないが反発するのもアホらしい。

ようするに、藤森に会わないようにすれば彼女たちの気持ちは納まるのだろつ。

「いいよ」

これ以上の口論は時間の無駄。その条件を承諾すればすむのならば、と頷く。藤森に合わないからといって里丘に不都合なことは特別な。

反論されるかと身構えていた女の子たちがほつと息をついたのがわかった。

終わりかな。とその場を立ち去るために背を向ける。

その背に後ろから声がかかる。

「ありがとう」

お礼を言われる筋合いはないが、わざわざこんなところまで呼び出してくれたのだ。それくらい素直に受け取っておこう。

「いえいえ」

振り返らずに手を振る。

彼女たちの表情までは見ない、関係ないことだから。

そんなことには髪の先程の興味も沸かない。

「藤森」

偶然にも、五限目の移動教室からクラスへ戻る藤森を見かけたので面倒なことはさっさと済まそうと呼び止める。

「よお、珍しいな。里丘から話しかけてくるなんて」

「まあね」

確かに。

藤森とは図書室以外の場所で話をした記憶がない。

彼女達が心配する要素など二人の間には微塵もないのだが。

「放課後、図書室行くんだろ」

恒例となりつつある図書室通いに、連れができたのもそれはそれで楽しかったのだが事情が変わった。

「私はそのつもり。そのことで話があるんだ」

「なに？」

移動していく群れの中に先刻さうきの女子達の姿を見つけて言葉を濁す。藤森と同じクラスの女子だとは思わなかった。

まあ、考えてみればその方がしっくりいくのだが。

「場所変えない」

「おう」

午後の授業が終われば放課後まで話す機会はない。今の内に話しておいたほうが懸命だろう。

「で、話って？」

人気のないところまでひっぱってきたところで藤森が尋ねる。

「彼女、飯田さんだっけ、告る気無いの？」

「話がみえねーんだけど」

突然そう切り出した里丘に面食らっているようだ。

遠回しにいうのはやめだ。藤森には直接話したほうが妙な誤解を生まないですむ。

「藤森のこと好きな子がいて。放課後、私と会ってるのが気にいらないみたい」

里丘の齒に衣着せぬ物言いにさすがに察したのか眉をひそめる。

ここまで言って気がつかないならこいつは馬鹿だ、と決めきっている里丘の期待を裏切らない。

「何か言われたのか」

「うん」

「別に気にしなきゃいいじゃん」

気にはしていない、実害はなかった。…といえるかどうかは甚だ疑問だが。

「そうなんだけど。藤森を好きな子にしてみれば、不安なんじゃないの」

例え現在二人に友情以上の感情が無くとも、藤森は男で里丘が女だという事実は変わらない。何がきっかけで進展するかわからないからこそ彼女達は不安に駆られる。

「ああ、そういうことか」

「そういうこと」

理解していただけたようだ。

「言っただの誰？」

藤森の眉間に寄ったシワが不快を示しているのはいやでも見て取れる。

「教えない」

聞きそうだとは思ったが、ここで答えるのは不味いと頭が判断する。あの中には例の彼女もいたのだ。

「俺そーいうのムカつくんだよね、俺に直接言えばいいじゃないか」
「そうそう、言えば藤森がどういう行動にでるかわかるから。言わないで済むことは言わないに越したことはない。」

「それができるならとくにやってるでしょーが。告白するのって勇気いるっしょ？」

言われて、藤森が言い澀む。

彼自身、告白に踏み切れていないのだからその心理はよくわかるのだろう。

「…」

好きな人に対して臆病になるのは誰でも同じ。彼女たちが特別じゃない。

偽善でも、傷つく人が少なくて済むのならその方がいい。

「説明終わり」

「迷惑かけたな」

すまなそうに頭を下げる藤森に里丘が笑つ。
そんなの迷惑のうちには入らないよ。
「かまわない。じゃあね」

——放課後

「で、なんでまた来てんの」
いつも通り姿を現し向かいの席に座った藤森に、おいおいといった表情で里丘が話しかける。

これでは、彼女たちの前で藤森を連れていったことが逆効果になる。

事実とは関係ない妬^{ねた}みもソネミも受ける筋合いはない。

「やっぱりおかしくない？ 俺たちが会おうと会うまいと関係ねーじゃん」

思ったよりシワの少ない脳ミソで考えたらしいが、少ないシワは急には増えないものだ。

「そんなの女の子たちには通用しないよ」

「ダチなら普通だろ」

口を尖らせてもダメ。

「考えが浅いねー。異性間での友情はありえないって子たちにそんなのが通じるわけないって」

「里丘もそう思ってる？」

んな訳ないじゃん。

「思ってるないよ。一般論ってやつでしょ、基準が誰だかしんないけど私は藤森のこと特別な感情で見たことない」

「俺だってそうだよ」

女の心理は単純で複雑なのだよ藤森君。里丘は物分かりの悪いワトスンに謎を解く鍵を与えるときのホームズのような心境である。

「面倒だな。また、明日もここに来る？」

「当然」

がつちし顔の横でガッツポーズをつくる藤森に里丘は頭を抱えた。
——やる気満々のこいつを、誰かどこかに埋めてくれないか？
「わかった、私は明日からここには来ない。できるだけ早くコトが解決することを祈るよ」

言い残すと荷物をまとめて図書室をあとにする。

——翌日の放課後

「藤森ー、今日は彼女のとかいかなーのかよ」

何のクラブにも所属していない藤森は、ぼーっと窓の外の雲を、見るともなしに見ていた。

ドンと背中をつかれ衝撃で勢い余って額を机にぶつけた。

痛ーい痛ーいおデコをさすりさすり恨めしげな顔でギロリと見上げればにやにやと笑うそいつ。

鈴木が立っていた。

「かゝのゝじょゝ？」

鈴木は隣の席の椅子を引きずり寄せ座ると、このこのゝとわき腹に食い込むほど強く肘でつついてくる。

——だから、痛えっての！

「そんなもんできた覚えも、作った覚えもねーよ」

否定する藤森に鈴木がわき腹をつつくのを止め、机に腕を突きその上に顎を乗せて言ってくる。

「ここんとこずつと通ってたじゃねーか。用もないのに楽しそうに図書室。彼女できたんじゃないの？ クラスの女子共が噂してたぞ」

その根も葉もない（根はないが葉はあるか？）噂のせいで俺は里丘のペースを乱しちまったんじゃないか。

苛つく気持ちが机を叩く。

「里丘とはそんなじゃねーよ。ただの友達^{ダチ}だ」

里丘とは放課後の図書室でしか会ったこともねーし。別に彼女にしたいと思ったこともない。ただ、話していると楽なのだ。

好きな子相手に話すのはドキドキするし、ちょっと緊張したりもする。何より楽しい！

でも、藤森にとって里丘はそういう相手ではない。

話せば話すほど、何というか『男友達』という感覚が強くなっていく気がする。本人に言ったら拳が飛んできそうだ。

さばさばしているところも、口の悪さも、考え方も。里丘は藤森にとって間違っても恋愛の対象にはなりえない、色恋とは無縁のところにいる存在だ。

「えっ！ お前が会いに行つてたのって三組の里丘か！？」

—— 何だ？ やに食いつきがいいな

里丘の名前を出すと鈴木の眼の色が変わる。

「紹介しろっ！」

「はあ？」

これは予想外の反応だ。

「俺、あーいう子タイプなんだ。静かで控え目で可愛いけど、一人でいること多いしなんとなく話しかけずらいところあるじゃん。その点、お前を通してだったら上手くいきそうな感じしねー？」

—— 里丘の本性を知らない、こんなそら恐ろしい台詞を吐くヤツもでてくんのか？

里丘は可愛い。

目はぱっちりで真っ黒い髪が腰まである、『黙って』座っていれば日本人形のような。身長は150後半くらいでスタイルもいい、ウフフと上品に笑い、『黙って』立っていればどこのお嬢様だといわれてもおかしくない容姿をしている。それは認める。

が、そう、この『が』が問題だ。

言い換えるならば「しかし」でも可。

確かに外見は文句のつけようがないほどに可愛い。が、『黙って』すれば』というのが必須だ。

話してみなければ判らないギャップというものが、人には多々ある。鈴木を考えるようなイメージを持って里丘に接したら理想がガ

ラガラと音をたてて崩れていくのは想像に難くない。

憐れみを浮かべた目で藤森は鈴木を見た。

「……しねーよ」

お前のためにも、里丘だけは紹介しないで置いてやる。

鈴木、理想が理想でありつつづけることを祈るよ。

藤森の肩を掴みガタガタ揺さぶり紹介しろといい募る鈴木の声
遠くで聞きながら、藤森は心に固く誓った。

【4 化学準備室】（前書き）

藤森とは合わない。決めた矢先、里丘に興味を示し始める男がいた。

【4 化学準備室】

週明けの校内は気だるい空気が蔓延まんえんしているようだった。昼食をとればさらに満腹感で眠くなる。

午後の授業の予鈴がなるのを聞いていながら、里丘は中庭をフラフラと歩いていた。

教室とは違う方向に覚束おぼつかない足取りで進んでいく。

時折立ち止まってはその場でゆらゆら揺れ、首がカクンと後ろに仰け反り慌てて頭を振ると、またもフラフラと歩を進める。

と、いう動きを繰り返していた。

——なに、してるんだ？

そんな様子を2階の通路から見ている影が一つ。

窓の外を見つめて怪訝けげんそうに首を捻っている。

「おい紀田、さっきからなにみてんだよ」

移動教室のため、クラスメイトと地学室へ向かっていた紀田の足が止まっている。

「どうした」と近づいてきた島井が紀田の視線の先を一緒になつて見た。

「おつ、里丘じゃん、五限目始まるのにどこいく気だ？」

本人無自覚なのだが、里丘は目に付く。なんといってもやはり、腰まである長い髪は一度見たらそう忘れるものではない。

「これ、頼む」

差し出したのは地学の勉強道具一式。有無を言わず島井に預けると踵を返し走り去る。

「えっ、どこいくんだよ」

後ろから島井の呼ぶ声が響いている。

「気っ持ちいー」

そこには、ようやく目的地にたどり着いた里丘の姿があった。

理科棟化学室には実験台が9台。

表面を黒く加工されたテーブルが、動かないよう床に固定されている。

加工された台は冷たく、頬を押し当てるとその冷たさが心地よい。五限開始のチャイムが鳴る。

化学室左奥の一番端の席にいる里丘は、一向に起き上がる気配をみせない。

この時間はサボると決めているらしい。

zzz

「まずい。…六限目がはじまるな」

「zzz」

五限終了のチャイムの音にまだ頭が重いがなんとか起きようと努力してみる。横から聞こえる規則正しい寝息が再び里丘を眠りにいざなう。

——寝息？

聞こえてきた寝息につられそちらをみると、里丘同様寝こけている学生服の男がいる。

「んあ？」

ぼんやりとした思考でパチパチと目を瞬かせる。

授業が始まるまで一人だったとおもっけれど、隣にいるということとは当然彼もサボりだろうと理解する。

「おい、授業始まるよー」

肩を揺さぶられ、頭を持ち上げるとこちらも寝惚け眼で辺りを伺う。

「おはよう」

昼間にする挨拶じゃない。

「授業始まるよ」

弾かれたように立ち上がる紀田に欠伸を噛み殺し里丘が言う。

「や、」

「や？」

あせあせと辺りを見回していた紀田が、状況を把握したのか、またも椅子に掛けると、

「…チャイムなった？」

聞いてくる。

「まだ、五限終了のは鳴ったけど。六限受ける気ならはやく戻ったほうがいいよ」

「里丘は？」

「私はいいの、サボリ」

化学準備室に男が一人。

名を松宮^{まつみや}双葉^{ふたば}という。

白衣に身を包み、机に向かって授業の準備をしている。教諭暦一年、駆け出しの教師だ。

昨年大学を卒業したてで教職にありつけたのは運がいい。

それ以前に彼自身が勉強家で努力の人だということも忘れてはならない。

松宮には2才年下の幼馴染がいる。

名前を里丘^{きょうか}享日。

朋日とは五つ違いの兄だ。

歩いて1分もかからない近所に住んでいるのだから子供の頃はよく里丘兄弟とも遊んでいた。

朋日が中学にあがる頃には里丘家の人間は揃って海外と日本を行き来していたので近所といえど顔を合わせる機会も減りはしたが、親同士の仲もいいので帰国するたびに家同士で付き合いがある。

現在でも、享日は帰ってくる度に必ず松宮に連絡をいれている。

眠気覚ましにと入れておいたコーヒーマーカーのスイッチがカチリと音をたてて切れた。

このコーヒー豆も享日からのおみやげである。好みを熟知しているせいか享日のみやげにはハズレがない。香りを楽しみながらカップに注ぐ。

バンツ

準備室の扉が前触れもなく開いた。

「松ちゃん、コーヒーちょうだい」

無遠慮にズカズカと部屋に踏み込んできた朋日に、あやうくこぼすところだったコーヒーを机に置く。

「こらっ、先生と呼びなさい。授業はどうした？ またさぼりか」

「いいのいいの、どうせ英語だし、今日は小テストの答え合わせだから、出てもでなくても一緒」

朋日のセリフに松宮がこめかみを抑える。頭が痛い。

「おーまーえーはー、性格まで亨日に似てきたな」

「兄貴の背中見て育ったからねー」

「威張るな」

諦めモードの松宮はさておき。朋日が催促する。

「それより、コーヒー二つつ」

「はー、暖簾に腕押し、朋日の耳に念仏だな」

「まーまー」

「ん、二つつ？」

「連れがいるのだ。おーい、こっちなよ」

がくーん、と音がしそうな勢いで松宮の首が垂れる。

「しくしく、どうして俺が生徒にコーヒーをふるまわねばならんだ」

いいながらも甲斐甲斐しくカップを二つ棚から取り出す。差し出されたのは松宮の好みでアメリカン。

「いーじゃん」

「良くない！」

キツと睨み付けるのを朋日は片方の肩を軽く上げていなした。

「すみません」

朋日の隣では殊勝にも紀田が頭を下げている。

「他のクラスの子まで巻き込んだじゃダメだってあれほどいったのに」
しかし松宮の叱責は里丘にのみ向けられている。当の本人は至って呑気である。

「暗い過去があるんだもんね、松ちゃん」

「そうだよ！ 俺がお前の兄貴に巻き込まれてどれほど迷惑したところか！ ぐわー、数えきれん程のこの恨みつらみどうしてはれよう！？」

お世辞にも素行が良いとはいえなかった享日の面倒をみてきたからこそ松宮のセリフだが。

「知らん」

一蹴。

そっぽを向いてカップを口に運び、何事もなかったかのようにコーヒーを飲む朋日に、松宮が激昂した状態ではくぱくと言葉をさがすが限界が来たようだ。

「……ふー」

青ざめてパタリと倒れてしまう。

「せ、先生」

「大丈夫大丈夫、ほっとけばそのうち息吹き替えすから」

慌てて紀田が助け起こすが、朋日は無情にも言い放った。

「お前なー、たまには本気で授業受けなさい。成績悪くはないんだから」

おろおろと準備室備え付けの冷蔵庫から「ひえびた」を発見した紀田に、松宮はあてがわれたそれを額に張り付けこめかみを押さえながら説といている。

「わかってるよー」

口を尖らせ拗すねる朋日に首を捻る。

「元気か？」

付き合いの長さがものをいう。

松宮は決して鈍くはない。いつもとは違う朋日の機微を松宮は敏感に察していた。

「ふっ、朋日はいまやさぐれているのだよ、松ちゃん」

視線を落とし、ふいふと溜め息つく朋日の頭をぽんと叩く。

「明日はちゃんと授業に出るんだよ」

「へーい」

途端、にやつと笑い返事する。ゲンキン。

「ごめんねー、なんだか結局サボらせたみたいで」

朋日は紀田と連れ立って教室へと戻っていた。

LHRも既に終わっているだろうが、荷物は取りに戻らなければならぬ。

さほど悪いとも思っただけな言いつぶりに、紀田が苦笑を浮かべる。

「いや、俺は」

「里丘！」

突如、空から降ってきた声に仰ぎ見れば二階の渡りから身を乗り出し藤森が手を振っている。

「あゝ、藤森。息急切ってどうした？」

「どこいったんだよ、探したんだぞ。俺、これから飯田と会った」

「とうとうその気になったのか。頑張れよ」

「サンキュー」

時間が迫っているのか言うだけ言って慌しく去っていく。

去っていく後姿を見送る朋日に紀田が訊いてくる。

「あいつと付き合ってたの？」

紀田を見て、溜め息を一つ。もう幾度目かもわからないほど溜め

息をついている気がする。

「は、違うよ。ただの友達」

「付き合って、ないのか？」

「藤森はねー、いい男^{ヤツ}なんだよ。一見軽薄そうにみえて中身は（意外と）しっかりしてるし。顔も女受けすると思うし、面白い。でも、本当にただの友達。第一、今あいつ何しに行ったと思う？」

「さあ」

「好きな子に告白しにいったの。どうしてみんなそう勝手に事実を曲げたがるのか不思議だよ。…たままないね」

朋日の横顔には色濃く疲れの色がみえていた。

【5 化学部入部】（前書き）

はあ、なんでそうなるかな？ 朋日の溜め息は今日も数えきれないほど吐き出される。安息の地はどこにある！？

【5 化学部入部】

「ちょっと可愛い顔してるからって他のクラスの男子にまでちょっかい出さないでよ」

きりりと形のよい眉を吊り上げひどい剣幕で捲まくし立てる。

そう言われても、皆目見当がつかない朋日は目を白黒させていた。

「????」

「黙ってないで、なんとか言いなさいよ」

更に別の子が言い募るのに、既視感きしかんを覚える。

——そういえば、あの時も

藤森の一件で呼び出されたときもこんな風に数人の女子と相對した。何ゆえ女の子は集団になるのだろう。

「あの、状況が見えないんだけど」

なんとか言えと言われても、まず何の話なのか分からないでは話にならない。

「とぼけないでよ、三組の藤森君がダメだったからって、次はうちのクラスの紀田君だなんて虫が良すぎるんじゃないのっ!？」

——藤森がダメ?で、次が…紀田? ……!…勘弁してくれよ…

「恐れー、女が集団で一人を締め上げてるぞ」

昼食を終えた一団がぞろぞろ教室へと引き上げていく中、一人が何気なく見た窓の外、女生徒の集団が険悪な空気を発していた。中庭は二階の窓から見下ろす形になるので女生徒たちは見られていることに気付かない。

「隣のクラスの里丘じゃねーか」

また別の一人がはじめの男子生徒の肩越しに窓の外を見ていう。

「そっぴや俺こないだも見たぜ。藤森に近づくなつて脅しかけられてんの。あっさり頷いてたけど、藤森とはどうなつてんだろっな」

また別の一人がいう。あつという間に窓には人だかりが出来てい

た。

その中に、まさか自分がその女生徒たちの話の当事者だとは知らぬげに紀田がいた。

紀田は隣にいたクラスメートの話が気になるらしい。

「前にもあったのか？」

「一週間位前に、別のところだったけど呼び出しくらった。メンバーも違うみたいだな」

「あれってもしかしてうちのクラスの女子じゃないか？」

前のほうの一人が指して言う。紀田もその集団に目を移した。確かにクラスメートの姿がある。

「本当だ、一番前にいるのって小泉じゃん」

「あいつら何やってんだよ」

「里丘、泣くんじゃねーの」

別の誰かが心配そうに言うのが聞こえた。

「紀田、お前小泉と仲いいじゃん、止めてこいよ」

言われるまでもなく、紀田は中庭へと猛ダッシュしていた。

「お前ら、一人を集団で囲んでなにやってんだ！」

「紀田君！」

さっきまでの威勢はどこへやら、おろおろ狼狽^{うろた}え始める。泣きだしそうな子すらいる。

朋日は「しめた」とばかりに、憤^{いきどお}る紀田のシャツをひっぱる。

「丁度いい、この子たちに説明してくれない？ 誤解してるみたいなんだけど、聞いてくれなさそうなんだよね。あなたたちも本人の口からはつきり言ってもらった方がつきりしていいでしょ。後、よろしくね」

交互に目を移して話すと、泣く素振りなんて微塵もみせず後を紀田に任せて何事もなかったかのように去っていく。

呆氣に取られているのは女生徒だけではない。紀田もぽかんと朋

日を見送った。

朋日は中庭からその足で化学準備室に来ていた。

ココ以外、構内で落ち着ける場所がない。

「松ちゃん。ちかれたよー」

松宮にカフェオレを要求しておいて、自分はだらりと机に張り付いている。

「…朋日ちゃん、一応君は学生なんだからそうそう化学準備室に入り浸らないように。いくら幼なじみでも、俺が先生だということに変わりはないんだから。特別扱いはいしたくないんだ」

「そーだねー、また変な話になっちゃうと松ちゃんにも迷惑かかったっちゃうだろうしな」

「変な話？」

「うーん、なんでもなーい」

「最近よくここにくるようになったのに関係あるのか？」

「おっ、なかなか鋭い指摘」

「ちやかさない。朋日ちゃんがよく眠るのはストレスのせいだって、亨日が言ってたのを思い出したんだよ」

「六限は出るからさー、少し寝かせて」

「ねえ松ちゃん、兄貴ってクラブ入ってたっけ？」

二十分もそうしていただろうか。朋日はムクリと体を起こすと机に向かう松宮の背中に話し掛ける。

「んー？ 亨日はいろいろ試合があると借り出されてたな。余計な力が有り余ってたからね」

自分の調べ物もあるだろうに、律儀に返事してくる。

「亨兄は人付き合い上手いもんね」

「そのくせ特定のクラブには所属してなかったな」

「私がいたからだよ。親父も母さんも、滅多に家に居なかったし、小学生の私一人家においとくわけにはいかなかったんでしょ」

「あ、…ごめん、考えなしだった」

くるりと向きを変えて殊勝な態度で頭を下げる。

「よいよい、松ちゃんは嫌みでそんなこといわないってわかってるから」

冷めたカフェオレをぐいっと飲み干す。

「朋日ちゃんは、クラブには入らない？」

「そだねー図書室にも、もう行けないだろうし。考えてみるかな」
「運動部は？」

「あの連帯感がやーなんだよね。先輩後輩の縦社会も好きじゃないし」

「文化部は？」

「なにかお勧めある？」

「美術部とか」

「…私の成績知ってて言ってるの？ 赤点ぎりぎりだよ」

「弱点克服にはもってこいじゃない」

「じゃない！」

断言できる。芸術系にはぜえーったい向いてないって。

「松ちゃん顧問してるクラブとかないの」

なんととはなしに流れて話を振る。大抵の先生方は二つ以上のクラブを掛け持ちで受け持っている。

顧問だけでなく、副顧問という役職が存在するからだ。

ちなみに松宮は弓道部の副顧問に就いている。

「あるよ、か…」

「か？」

言葉に詰まる松宮にん？と朋日が体を乗り出す。

「ダメ！俺が受け持ってるのは同好会寸前の弱小だから活動も一人しかしてないし」

「へー」

焦って妙な言い訳をしている松宮に朋日は腕組みをしてドツカと椅子の背もたれに背を預け、組んだ足をゆらゆら揺らしている。視線は斜め上を見ている。なにやら考え事をしている様子。ざわりと走った悪寒に肩を竦め、松宮が恐る恐るきいてくる。

「何か、やなこと、企んでない？」

足がぴたりと止まる。

視線は松宮をロックしている。

「決めた。そのクラブに入る！ 入部届け頂戴」

差し出された手にずりつと後ずさる。

「しまった……」

時既に遅し、迂闊にも問題児を一人補充してしまったようだ。

思いたったが吉日。

朋日は五、六限目の休み時間を利用して二年の教室へと来ていた。「柳先輩ってこちらのクラスですよ。いらっしゃったら呼んでいただけます？」

戸口の生徒をつかまえて化学部部長の柳を呼び出してもらった。た。

「柳ー、一年の子が呼んでるぞ」

教卓の前で友人と話し中だった男子生徒が呼ばれて振り向く。

「おー」

やたらとひよる長い。

第一印象はそんなカンジ。

158センチの里丘とゆうに30センチは違うだろう。銀縁眼鏡の奥に細い瞳が、見えるともなく見えている。見上げる朋日を上から見下ろすと首をかしげた。

「どちらさん？」

「一年の里丘といいます。化学部の活動曜日を教えてもらおうと思っ
つて」

「月々金、そんなのきいてどうすんだ」

「入部したのでよろしくお願いします」

.....。

「は？」

「ではまた」

軽く敬礼を送ると点目になった柳を残し六限目の授業を受けに教室へと戻った。

その日の放課後、顧問一人、部長一人、部員一人という化学部は化学室へと集まっていた。

「というわけなんで、ひとつよろしく頼むよ」

顧問の松宮が手短に挨拶を済ませる。

「本気なんだ？」

「はい」

顔合わせを終え、お役御免とばかりに準備室へ引っこ込もうとしていた松宮がふと思い出したように足を止めた。

「柳、先日みたいなことは、できればなしの方向で」

「失敗は成功の母です、松宮先生」

きっぱり言い切る柳にこれ以上の言葉が意味を持たないことを悟り、内心松宮は空しくため息を吐く。

「...ほどほどにね」

そんなやり取りに朋日は首を捻る。

【6 謎の物体X】（前書き）

安息の地を求めてさまよう朋曰。図書室から化学室へと舞台を移す。

【6 謎の物体X】

白衣に身を包んだ二人は、広い化学室の中「こっそり」という表現がピッタリなほど隅のほうの実験台で、なにやら実験を開始していた。

「柳先ばーい、なんか煮立ってますよー」

実験開始から焼くこと煮ること数十分。

原形とどめぬそれは、ビーカーの中おどろおどろしい色を揺らめかせながらバーナーによって熱せられ噴き零れ^{こぼ}んばかりに煮立っていた。

かなりの時間火にかけられ、水分も多少飛んでいるはずなのに、それは量を減らすどころかますます重^{かさ}を増しているようだ。

「ぐつぐついいでしたらガス止めて」

グツグツ？

頭をぐぐつと横に逸らしビーカーを眺める。

……そういうことは先に言ってくれ！

既にそれはぐつぐつを通り過ぎて、ぼっこんぼっこん、マグマのように波打っている。

「ビーカーから謎の液体溢れそうですっ」

「蓋^{ふた}っ！」

せわしく、別のビーカーを掻き混ぜながら指示してくる。

「蓋って言っても、あ、これでいいか」

辺りを見回し、手近なもので封印する。

蓋というよりはその方がしっくりくる。

いまにも飛び出してくさうなそれはバーナーをどけた今も変わらず沸騰している。

「何、作ってるんですか？」

後ろからのぞき込むと緑色のこれまた、まがまがしい液体を黙々とガラス棒で混ぜている。

「……」

段々粘り気が増しているようだ。

「練り消し？」

時々横に置かれたフラスコの、透明だがトロリとした液体を入れ
ては、訳の分からない文字の書かれた紙を千切り入れ、ぶつぶつ呟
いている。

「アラ……、エッ……」

声が小さくてよく聞き取れない。

「粘土？」

高校生にもなって、それはないだろうと思うがどうみてもソレは
油性の粘土。

保育園の時使用したアレ、そのものだ。少々どろりとしてはいる
が。

「……」

「実はただの消しゴムとか？」

掻き混ぜる手の速度は増していく。カチャカチャとガラス棒がビ
ーカーにあたる音も速さを増す。

「静かに！」

試験管たてから順に、緑、茶、透明、赤の何で作られたのか知り
ようも（知りたくも）ない溶液がビーカーの中へ注がれる。

バーナーの火が落とされてもくつくつと煮え立つビーカーの中で
は、またもどよんとしか表現出来ない色がゆらゆら。

ぽこつと時折可愛いらしい音をたてて弾けている。

「？」

ぽこつという音が、ぽこぽこつと早いものに変わり、もりつと音
をたて盛り上がる。

「！？」

それは、もりもりつと成長を続けビーカーに納まるはずもない質
量で盛り上がり、ピクピクと蠢うごき。

「……………」

パァーン！

一瞬、閃光^{せんこう}を放ち。次の瞬間、激しい破裂音と共に弾け散った。
「ぎゃーーーーーーー！！」

二人飛び上がって抱き合う様はコメディー以外の何物でもない……。

「柳さんって、マッドだったんですね」

散々な実験結果のあと、服にまで染みを残し飛び散った謎の液体を雑巾で拭き取りながら里丘が表情もなく感想を述べる。

「何をいう、神秘の生物を造り出そうというこの心意気がわからないのか」

自分は焦げついた実験道具をたわしでごしごしと洗いながら弁明する。

「神秘の生物というよりは謎の物体じゃないですか！ 叫んでたのは誰でしたっけ」

恨みを込めて柳を見る。

ナメクジをつぶしたらできそうなねろんとした液体を、ひたすらねちよねちよと雑巾で集めていた里丘が、それを振り上げ今にも投げつけそうなのを察して流しの向こうへ隠れる。

驚くほどの俊敏さで。

そして、目から上だけを実験台からだして言う。

「……あれは、喜びの声だ」

恐怖のあまり叫んだとは口が裂けても言えない性格らしい。

里丘の肩ががつくしと落ちる。

「はあ、明日からは一人でしてくださいね。邪魔にならないよう端のほうで本でも読んでますから」

【7 立入禁止令】（前書き）

怪しげな実験を経て、どうにか化学部に落ち着いた朋日。

【7 立入禁止令】

ひとしきり調べ物を終えた松宮は窓辺に椅子をおき、頼杖ついて眺めるともなく外をみていた。寒くなってきたというのに生徒たちは元気なもので、ふざけあいながらグラウンドのほうへ消えていく。数年前まではあの中に自分もいたはずなのに、こうしてみると随分前のことのように思える。

「平和だなー」

思わず口をついて出た言葉にこたえる声があった。

「平和ねー、松ちゃん」

「うわあ！」

いつ入ってきたのか隣で同じように朋日が頼杖ついている。飛び上がった松宮に呆れ顔で朋日が言う。

「何驚いてんの」

松宮は「口から心臓が飛び出るかと思った」などといいながら胸を撫で下ろしている。

「いつからそこに」

「ホームルームが終わってからずっといるけど」

つまり、十分も前からそこにいるというわけだ。

「…そう」

気付かなかった松宮が鈍いのか、気付かせなかった朋日が凄いか。

「亨日兄、帰って来てるよ」

「知ってる」

当然のようにかえってくる言葉に朋日が意味深に松宮を見つめる。当人、再びぼけら〜と外の景色を眺めているので朋日の視線には気付かない。どうやら単に今日の松宮の様子がおかしいらしい。心此处にあらずといった具合だ。

「ふ〜ん、『知ってる』ね。会いにこないの？」

「別に、…用もないし」

「恋人でしょ」

「だ、だ、誰がそんなこと」

朋日の言葉に面白いくらい焦っている。ぶわっと汗が噴出す。

「二人見てればわかるよそのくらい」

「違う、…俺が、一方的に」

好きなだけだ、という声はわずかに聞き取れるくらいの音量で、真っ赤になって言い返す松宮はやたらと幼い。

「松ちゃん、可愛いー」

うりうりと頬をつつく朋日に松宮は「大人をからかうな」と怒っているが、真っ赤になったその顔で言われてもちっとも恐くない。

「私、今日帰るの遅くなりそうなんだよねー、亨日兄一人で夕飯食べないといけないんだ。可哀想だとおもわない？」

「誰か、夕飯作ってくれる人いないかなー」

「彼女とかいないのか？」

「いないよー、でも亨日兄もてるから、ぼーっと指くわえて見てると、とんでもない女にひっかかってくるかもね」

「行くっ！」

「よっ、ガンバレー」

松宮を送り出した朋日は、松宮が帰ってしまい実験ができず昨日の結果をまとめている柳と背中合わせに座り、なにやら読書に励んでいる。

ある意味静寂であつた。

それも突然の来訪者に破られる。

「里丘っ！」

扉を開ける音も乱暴に一人の男が飛び込んでくる。

「藤森、久しぶりー」

うってかわつてのんびりと返す朋日に怒りに満ちた表情で藤森が詰め寄る。

「お前、飯田があの中にいたこと黙ってただろ」

さっぱりわからない、突然やってきて何を言い出したのかと首を傾げる。

「？」

「とぼけんな、俺に近づくなつて言いに来た奴らのなかにだよ」

「あゝ」

先日あいまいの裏庭でのことに思い当たり、もうばれたのかと曖昧あいづちに相槌を打つ。

「やっぱり。どうして言わなかった？」

「待つてよ、何か関係あんの。結果的に両想いだったつてことでしょ、問題はないじゃない」

怪訝けげんに眉を寄せる朋日に藤森は納得できない様子で更に詰め寄る。
「ダチにんなこといわれて、のほほんとお付き合いなんてできるわけねーだろーが！」

その台詞に頭を抱える。

「…バカ。お前はキング・オブ・バカだ。先ばーい、どう思う？
普通の男はダチより彼女優先だよねー」

振り返り先輩の意見を仰ぐ。

「俺は何をおいても実験優先だな」

全く興味なし！といわんばかりに背を向けたまま返答してくる柳に朋日が慌てた。

「ちよおつと待て！ この人は例外だ。見るな、聞くな、異常が伝つ染る。命が惜しかったら近づくな！」

実験結果をまとめていた柳が朋日の言葉に手を止めた。

実験簿と書かれたそれは、昨日の実験で蓋代わりにされ無残にも裏表紙がでろーんと融とけていたが全く気にする様子もない。

一見神経質そうに見える銀縁眼鏡の奥はなんにも考えていないようにも見えるが一旦実験を始めると怪しい色に変わる。

およそ繊細とはいえない神経の持ち主だな、と昨日実感したばかりなのに失念していた。

いったいあの成分は何だったのだろうか？

裏表紙が厚かったため中まで浸食してはいなかったが、紙を溶かすほどの液体だったことは間違いない。

「俺はLEVEL4ですかい！？」

感染後、発病したら必ず死に至る細菌と同等の扱いをされて、ムキツと振り返る。言葉づかいが微妙におかしい。

「似たようなもんでしょ」

ばっさりきりすてる朋日に「否定してほしかった」と柳の顔には書いてあるが昨日の今日でそれは無理な相談というもの。

「だいたいゴーレムだかゴム人形だか知らないですけど本気で造ろうとしてる人間なんか細菌扱いで十分です！」

いじいじと机相手に拗ね始めた柳に追い討ちを掛けるような暴言を吐き続ける。

「楽しそう……」

そんなやりとりをきいていた藤森がぼそともらす。

「里丘ここで何してんの？」

白衣に身を包んだ朋日と柳に気付いたのかきいてくる。

「あ、これ？ 化学部に入部したんだよね。こちらが唯一活動している部長で部員の柳先輩。図書室行くよりこっちの方が近いし、（柳が）観察しがいがありそうだったんで思い切って入部してみました。」

実害さえ無ければこんないい観察対象はいない。

ふふふつと楽しそうに笑い、白衣を見せびらかすようにくると回ってみせる朋日にいいことを思いついたとばかりに藤森が手を上げる。

「はいはいはい！ 俺も！」

「なに？」

なにが「おれも！」なんだ？と問い返せば、
「俺も入る！」

藤森がおもいがけないことを言い出す始末。

「はあっ!？」

「入部する!！」

「させるかー!!!！」

やっと、やっと安息の地を発見したのに、荒らされてたまるかとつばねる。

「どうしてだよ？」

理由なんて聞くまでもないだろうに。

「彼女はどつする」

「別れた」

あつさり言い放つ藤森に、ああああくとつめきながら朋日が頭を抱え、しゃがみ込む。

「とばつちりがこつちにくるじゃねーかよー。そしてまた取つただの取られただのあらぬ疑いをかけられて平穩無事な学校生活に支障をきたすはめになるんだ」

悪口雑言。

こんなやつだとわかつてはいたが、本当にどうしようもないほどこんなヤツだ。

あつけにとられて藤森はぼーぜんと朋日をみつめる。

「里丘つて、口開くととんでもねー人格があらわれるよな」

藤森の失言に恐ろしい形相で睨みつける。

こんな性格さらけださせてんのはためーだろうかと恨みを込めて「ああ？」

口から出たのは不良も尻尾巻いて逃げ出しそうな、不快感丸出しの声。

「こえー」

ざざつと引いた藤森（なぜか、柳も机の下に隠れている…）をびつと指差し言い放つ。

「うつさい。柳ちゃん、間違ってもこいつに入部届け渡さないでよ!！」

柳を見る瞳からはビームが出そうだ。

「おおー、段々格が落ちていくー」

苦悩している柳を尻目に、朋日は更に藤森へと最後通牒をたたきつけた。

「藤森は化学室立入禁止！」

【 8 里丘家にて】（前書き）

閑話休題。

【8 里丘家にて】

朋日が帰宅したのは、八時を少しまわろうかという時間だった。

「たっだいまー」

時間をずらす為わざわざ（いやがる）柳を誘って夕飯まで食べてきたのだ。少しの進展くらいあつて当然。意気揚々と帰宅したのも束の間。

「でていけっ！」

奥から聞こえる声におお？とのけぞると「帰ったばかりでそれはないっしょ」と上がり込む。どうやらキッチンの方から聞こえてきているようだ。

「わかったからわめくなよ。第一ここはオレン家だつての」

困り果てた男の声がする。

「兄貴？」

ヒョイッと顔を出すと兄・亨日きょうかの顔があつた。

「おー帰ったか」

よつと手を上げて笑顔で迎える。

その向かいには怒りに頬を染め、松宮が立っていた。

「どうしたの、松ちゃん泣いてるじゃない」

「それがよー、これ食つてみ」

困った顔で亨日が指さした先には皿に盛られた得体の知れないモノ。

「うげ、見るからに皿に盛つていいもんじゃないなこれは」

つい反射的に目を逸らし、鼻をつまんだ。

その料理（とっていいのか？）の第一印象は「残飯」だった。もしくは、「失敗作」。

色はこげ、匂いもこげ、味も当然こげだろうと思うのだが、その物体を前にしてしまえばこげであつて欲しいと祈りたくなる。

「ひっでー、兄妹揃つてなんだよ。せつかく、つくつたのに」

だばーと滝のような涙を流し泣き出してしまった松宮に、里丘兄妹は視線を合わせて互いに「どうにかしろよ」と訴える。

打開策が朋日の脳裏に閃いた。

皿を持ち上げると亨日の前に突き出す。

「これは兄貴が処分すべきだな。あーん」

条件反射的に口を開けてしまう亨日の口に容赦なくそれを流し込んだ。

「グアリボアリ、ボキッ、ゴッ、ぐ、ん。ヴッ」

あまり食べ物を食べる音としてはふさわしくない音が亨日の口から漏れ出てくる。

食糧事情の悪い（口に合わない）国を巡っていたせいか口に入れたものを出すことなく飲み下した亨日が、それでもここまでのモノはなかったと見えて目を白黒させている。その間も亨日の顔は赤くなったり青くなったり、白くなったりと大忙しだ。

差し出されたミネラルウォーターのボトルを受け取りなんとか飲み下すと恨みがましい目で朋日を睨んでくる。

「……………てめー、実の兄を殺す気か！」

「松ちゃんの愛は兄貴にしか受け取る権利はなーい」

朋日はどこ吹く風といった具合だ。

なにか言おうとしてさらにむせ始めた亨日に朋日が手を合わせる。

合掌。

兄貴、成仏しろよ。の聲が、亨日の耳に届いたかは甚だ疑問である。
はなは

なんだか随分疲れた気がする。

夕飯の後片づけもそこそこに、シャワーを浴びて部屋へと戻る。

さ、寝るか。とベッドに潜り込み電気を消して、落ちる目蓋をムリヤリ意志の力でパチッと開けた。

「……………なんで松ちゃん、私の部屋にいの？」

冷たい声が六畳の朋日の部屋の温度を下げる。

「えっ」

ベッドの横に敷いた蒲団でさっさと横になっていた松宮がビクツと体を強ばらせた。

「兄貴の部屋に行きなよ」

「やだ」

「ダダこねてないで」

起き出すと暴れる松宮の襟首をつかみ、引きずりながら朋日は階段をトントンと降りていく。

階段横の襖ふすまの前まで来て、中に声をかける。

「開けるよ兄貴」

返事がない。

「駄目だつて」

焦って引き留めようとする松宮には構わず襖を開けた。

そんな気はしていたがやはり寝ている。畳に敷いた布団から身体半分はみ出ていようとおかまいなしにグアーゴーと豪快にいびきをかいて爆睡中だ。

「ちっ、寝てやがる」

眠い上に面倒かけやがつて。

普段ならばしかたないなあと、笑って見過ごす（本当か？）この状況も悪魔になりはてた朋日には通用しない。

舌打ちと共に漏らされた言葉に助かったと松宮が安堵するが、それは少し早かった。

「ほら、諦めて、わっ！」

どこにそんな力があるんだといわんばかりの怪力で部屋の中に投げ込まれた。

勢い余って倒れ込み、亨日のそこだけはしっかりと毛布のかかっている腹の上へと見事に手をつく。

「つぐえ」

……全体重をかけて。

「おやすみー」

蛙を踏み潰したような声が暗闇から聞こえてきたが気にかかる様子もなく非情な妹は元居た自分の部屋へと戻っていく。

これでゆっくり安眠できるというものだ、くくく。と、眠さのあまり表情には出ないが心の中で笑っていた。

欠伸^{あくび}だってでるといふものだ。

「ごちぞーざばでした」

階下から呼ばれる声に起こされ、キッチンへと寝惚け眼で登場した朋日が松宮をみるなり、朝食には手も付けずそんなことをのたまった。

カクンと首を曲げる。眠いのか、頭は重力に逆らうことなく九十度に落ちている。

新妻さながら機嫌よく茶碗に（亨日が作った）ご飯をよそつていた松宮の手が止まる。

「ああ、間違い間違い。いやー、昨夜はあまりの激しさに家が壊れるかとおもったけど、大丈夫みたいね」

ぺしぺしと柱をたたき大丈夫かー、と答えるはずもない家に話しかけている。

まだ、半分夢の中にいるようである。

「けっ、仕組んどいて何を今更」

まんまと妹の策略にのつかってしまった手前、文句の一つも言わねば気がすまんと額にイカリマークを張り付け、（亨日が作った）味噌汁片手に亨日が返す。

「朋日ちゃん？」

二人の会話についていけないでいる松宮が不審気に朋日をのぞき込む。

半目のままにんまりと無気味な笑みをふりまき、何が楽しいのかくくつと身体を揺らしている。

「松っちゃん、忘れてたでしょ？ 兄貴の部屋が私の部屋の真下な

の」

瞬間、二人の会話が読めたらしい松宮の顔にぼつと火が点く。

「ひゃっひゃっひゃっ、かわえーのー」

柱で身体を支えてバンバンと松宮の肩を叩きながら、ひひじじのように笑う朋日に亨日が呆れた声で顔を洗ってこいと命じる。

「お前は変態オヤジか」

反論できない。

ブーツしていると柱に寄りかかったまま、寝てしまいそうだ。

「……」

きつと、まだ頭の中身が起きていないのだ。と判断し、顔を洗うべく洗面所へと足を向けた。

「あいつ…、そのうちぶちきれるかも…」

苦りきった表情で亨日が茶をすする。

「えっ？」

「いや、……勘だけだな」

亨日の言葉は暗示めいていて、松宮には理解できなかった。

それは兄妹だからこそその虫の知らせというやつなのかもしれない。朝からハイテンションでぶちあげまくっている妹の消えたほうに手をすりあわせ「くわばらくわばら」魔除けまよけの言葉を呟く。

どうかオレに災難が降りかかりませんようにと祈りを込めて。

妹が妹なら兄も兄。

逆もまた然りということをし、この兄はわかっているのか…。

【9 朋日大激怒】（前書き）

予感的中！ 沸点が少々高めな妹・朋日。それだけに、キレタ時の
アイツはやバイ。。。兄・享日の不安が現実のものとなる。

【9 朋日大激怒】

けだるい疲れは体だけでなく脳まで蔓延^{まんえん}し、眠気を誘っている。
気分転換に、と昼食は中庭へ足を運んだ。

まばらに人影もあつたが座れないほどではない。良さそうな木陰に陣取りベンチに座ろうかとも思ったが、一面には芝がはつてあり直に腰掛けたほうがゆっくりできそうだ。実際そうしている人のほうが多い。

木製のベンチに寄りかかり、足を伸ばす。芝生がふくらはぎをちくちくと刺激するが痛いというほどのこともない。

「美味し〜そ〜」

広げた包みの中、松宮が用意してくれた（正しくは亨日が作ったものを松宮が詰めただけの）弁当の蓋をぱかっとり除くと、栄養にも気を使ってくれたのか見目も鮮やかな内容に手を合わせて感激してしまう。

喋りがかなりトロクなっているのは食欲と睡魔の間で戦っているせいだ。

周りには数人ずつ女の子たちのグループが存在していた。

どんなに神経が鈍っていても感じる視線、そちらを振り向くと見覚えのある集団が目にはいる。

いらんものを見てしまったとばかりに目を伏せ、小さく舌を鳴らす。

前方三メートル位のところに、来たばかりなのか誰一人座ることなく立っている。

しばらくひそひそとやっていたが、

「声、かけてあげたら」

と一人が言ったのをきっかけに「一人じゃ可哀想だし」「誰か誘ったら」「〇〇が行きなさいよ」などなど。

わけのわからない同情を口にし、あげく誰が誘いに行くかという

相談まで始めた。

ぷち、ぷちと忍耐の緒が一本、また一本と切れていく中、延々続くかと思われた話し合いはそう長くは続かなかった。

「お昼、一緒にどう？」

気の弱そうな子が押し出されるようにして声かけてくる。

こりやまた、頼み事をされたら断れなさそうな子が来たもんだ、と一応愛想笑いを浮かべる。

あそこまで迷惑そうに言われた後、そ知らぬ顔で一緒に弁当を囲めるほど無知でも厚顔こうがんでもない。

「なんで？ いいよ別に」

簡潔に断りの言葉を述べる。

ちらりと集団に一瞥いちべつをなげると、にっこり笑顔をはりつける。

本人いたって悪意はないのだが、目が笑ってないのが怖い。

「せつかくの美味しいものが不味まずくなっちゃうでしょ」

ピキツ

音をたててその場が凍りつく。

悪魔モードに突入した朋日はそんなことには頓着しない。

只今、朋日はストレスにより、バラの刺状態とげと化しております。

色とりどりのお弁当を前に回復しかけていた症状が彼女たちの出現により更に症状を悪化させてしまったのだ。

そんな最低最悪の朋日に声をかけてしまったのは彼女たちが不運だったとしかいいようがない。

自覚がないものだから、よもや自分の言葉で空気が固まってしまったことなど一切気付いていない。取り出した箸で無造作に弁当をぱくつく。

懇切丁寧に断わりをくれてやったのだ、これ以上はなにを言う必要もないだろうと少女たちには目もくれない。

目の前ではくぱくと弁当を消化していく朋日に、徐々に少女たちの石化も解けていく。

昼休みには限りがある。固まっている場合じゃないと現状に立ち

返り、本来の目的のため輪を作りいつものようにとはいかないまでもそれぞれに弁当を広げた。

午後の授業が始まっているというのに、教室に朋日の姿はなかった。

それもそのはず、昼食の後満腹感に強力な睡魔が襲い、ベンチの上に腕を交差させ、組んだそれを枕代わりに惰眠^{だみん}を貪っているのだから。

そよぐ風は優しく、邪魔するものはなにもない。

教室では、英語教師がまたかと諦めの境地のため息をついていたが、快眠中の朋日に届くことはなかった。

ぱしゃつと顔で弾ける冷たいものに、雨？と重い目蓋をゆっくり押し上げる。

木々から覗く空は青く、雲もちらほら在りはするが雨を降らすほどではない。

気のせいかと目をつぶると、またもぴちゃつと頬に冷たいものを感じる。そして耳に届いたくすくすと嘲^{あざけ}るように笑う少女たちの声。何？ と頭を起こす。

頭が重い、典型的な寝不足の症状だ。だが、何も寝不足だというわけではない。

強くストレスを感じると眠気が強くなる、朋日の体質のようなものだ。

ちらちら星が舞う中、少女達は顔に蔑^{あげす}むような表情を一樣に浮かべて取り囲むように立っていた。

「約束を破ったあんたがいけないのよっ！」

言つて、持っていた紙コップを中身ごと投げつけてくる。

咄嗟^{とつさ}に手を出し避けようとするが、中の液体までかわすことはできず髪と肩にオレンジ色の液体が降り注ぐ。

突然の仕打ちに状況を把握することができない。

——約束？ 破る？

彼女たちは何をそんなに怒っているのか。

「藤森君には近づかないでって言ったでしょ。アイを泣かせるなんて許さない」

——アイ？

「紀田君になにいわれたかしらないけど、調子にのらないでっ！」

口々に罵る声ののが、キーキーと頭に響く。

寝起きの頭には刺激が強い。

それでもなくても神経が昂ぶつているときに聞く金切り声というものは耳元で鐘を鳴らされるのと同じくらいイタイ。

およそ二十人はいそうだ。それも藤森派と紀田派の二組が共謀したのか、単に鉢合わせしただけなのかは計りかねるが、一斉にしゃべり始めたときにはぶちつとはつきり朋日の耳に理性の音が切れるのが聞こえた。

どうしようもない、沸き上がるこの感情を抑える術など、もう見つからない。

抑える必要なんてない！

いつもは感情をセーブするはずのリミッターもブンと振り切れて一向に抑制する気配がない。

ざっと立ち上がると気後きおくれたのか一瞬引いた人波をかきわけて理科棟へと飛び込んだ。

後ろからは「逃げるな」「卑怯よ」と罵倒する声が追いかけてくる。

徒党を組んで一人を取り囲むのは卑怯とは言わないのか？

逃げ出すつもりは毛頭ない。

いい加減、こんな馬鹿らしいことには終止符をうちたかった。

勝手に勘繰って、訳の分からないことを押しつけて、拳げ句に約束を破ったと報復され、これで怒らなければいつ怒るんだ！

教室隅にある掃除用具入れを開ける。取り出したバケツにたっぷりと水が溜まるのを見て、怒りは納まるどころかそのバケツの中身

と同じ位溢れんとしている。

グイツと持ち上げつかつかと中庭へと来た道に戻る。

バケツの重さなんて感じなかった。ただ、このいっぱいになってしまったイライラを全部ぶちまけてしまいたかった。

バケツを持ち上げた朋日が次にどういう行動をとるか知り、逃げ惑う少女たち。追いかけて理科棟まで入ってきていた数人の少女がわれ先にと狭い出口をめざす。たかが水だ、朋日がかけられたジュースに比べれば、ベタベタすることもない。

全然マシというものだ。（こういう考えが既にキレているということなのだろう）

そこまで逃げ惑う姿をみるのは滑稽であつた。

頬が引きつっているのは笑いをこらえているせいかもしれない。

戸口に立つと勢いをつけて振りまわした。

色はついていないものの、朋日と同様、いや、それ以上に浴びてしまった者もいる。

それでも怒りは納まらない。蓄積された分余計に、消化し損ねてしまったのだ。

二・三日放っておいてくれたらすべてキレイに消化され、こんな危険な状態にはならなかったのに。

集団になると途端に強気になる少女たちが、鬱陶しくてたまらない。

朋日の身体の周りに白いモヤがかかってみえるのは錯覚などではなかった。

怒りの余り体温が上昇し気温の低さとあいまって、熱気が目に見える出ている。

幼い頃から年の離れた兄の後を付いて回っていた朋日、兄が喧嘩する度に加勢していたのは伊達じゃない。

こみあげる思いは感情と共に怒濤のように吐き出される。

「ざけてんじゃねーぞてめーら！ 人が大人しくしてりやつけ上がりやがって！ 約束だあ？ 誰に恋しようが勝手だけどなあ、人様

に一々つつかかってくるじゃねえよ！」

グアアーンと叩き付けられたバケツは無惨にもグニヤリと形を変えて中庭の隅へと転がっていく。

見送る少女たちの顔が蒼白になり、逃げ出したいが腰が抜けて立てないもの多数。あまりの迫力に蛇ににらまれた蛙と化してる者多数。もろもろの事情でその場から動けなくなってしまうっている。

「二度とその面見^{つら}せんな！ 女だからって容赦^{やじやう}はしない。ああなりたくなかったら、声もかけんじゃねえ！」

当然ビツとさされた指の先には先刻のバケツが。

まだ足りない、言い足りない、やり足りない、言葉でもバケツへの八つ当たりでもまだまだ解消できないこの胸のムカツキ。

「ああああ！ ムカツクツ！」

回し蹴りの要領で振り回した足が狙い通りクリーンヒット、ドアは砕ごと中庭へふつとぶ。

ガラスが砕けなかったのは奇跡に等しい。

前列の少女の鼻を掠^{かす}めるように地面に叩き付けられたそれは風を起こして動かなくなった。

誰一人として声を出すものもない。いや、出せないのだ。皆一様に青ざめ、恐ろしい化物にでも遭遇してしまったかのよう。

徒党を組んでタイフーンになった気でいたのに、それをも上回るハリケーンに遭遇して、何もできないで通り過ぎていくのを待つ事しかできない普通の人間だということを実体験して。

貴重だが、できれば二度とこんな目には会いたくないと心底怯えるほどの恐怖を。

それほどまでに朋日の怒りは凄まじ^{すこ}かった。

【10 そして…】（前書き）

とつとつ弾けてしまった平日。そして…。

【10 そして…】

散々だった。

兎にも角にも後は散々。

騒ぎを聞きつけ駆けつけてきた者たちが見たのは、ずぶ濡れになった少女たちとそれに向かって英語でわめき散らす朋日の姿。教室が近かったこともあって英語教師の笹田もその中にはいた。

一人、朋日の言葉を正確に捉えていたミス笹田は顔面蒼白になり、なんと言っているのかと聞いてくる教師陣に「とても、とても、私の口からは………」と言うが早いか泡を吹いて倒れてしまった。結果は、問題を起こしたとされる朋日に停学三日の処分が言い渡された。

学校全体が落ち着きをなくしていた。

授業を受ける当事者達の面々も、疲れの色を浮かべていた。

停学初日。

藤森は固い顔で一軒の家の前に立っていた。

学校では3限目の授業が終わろうとしている時間である。

純和風の二階建て、結構年季の入った家だった。

玄関先に表札がでている。

そこに『里丘』の文字をみつけ、目的の家であることを確認して、藤森は固い顔のままインタホンを押した。

「はい、いま開けます」

謹慎中だというのにどこか弾んだ声の朋日がぱたぱたと走ってくる音が聞こえた。声の主が玄関に顔を出す。相手を確認して、開いたドアはみるまに閉じていく。

「はい、さよーな、ら！」

無情にもドアは藤森の鼻先で閉められた。ご丁寧にもガチャリと音を立て、鍵まで閉めた。

「おいっ！ 開けろよ、里丘！」

「用があるんならそこで済むでしょ」

ドアの向こうから返事がかえされる。

「話がある！」

「私はなーい」

「頼む」

「あんだねー、ガツコ休みじゃないでしょ？ 授業抜けて来たの」

「……」

沈黙が肯定を意味していた。

しぶしぶと朋日が鍵を開け顔を出す。藤森は項垂れたま^{うなだ}ま上目遣いに朋日を仰ぎ見た。

そのいつになくしおらしい様子が哀れに見えたのか、ひとつため息つく^ととドアを開放する。

「ま、いつか。あがつて」

「いいのか」

「話があるんでしょ」

言ったときにはもう朋日は家の奥へと戻っていく。慌しく藤森も靴を脱いで上がりこんだ。

居間に通された藤森は、朋日が煎れたお茶を前に頭を下げていた。「悪かった。俺が短慮だったんだ。まさか、こんなことになるなんて考えてなくて」

「気付くのが遅いよ」

真剣に謝罪の言葉を述べる藤森に、首筋をぽりぽりと掻きながら朋日が言う。その態度はまったく藤森を責めてはいなかった。

藤森は、きっかけはどうあれ朋日の停学が自分の責任だ^{せい}と、どうしても謝りに行かねばと決意を固めてきた。当然、怒られることを覚悟の上でこうして朋日の家までやってきたのだ。

しかし、追い返されそうにはなかったが、目の前にいる朋日は怒ってもいなければ藤森を責める言葉も口にはしなかった。

「でも、時期的には良かったんだと思う」

「？」

何気なく口にされた言葉に藤森が首を傾げる。

「こつちのこと」

疑問を投げかける藤森の視線に、私自身の問題だからと朋日はあつさり流す。

あんなことがあったというのに、どうやら里丘は怒っているわけでも落ち込んでいるわけでもないらしい。ことに気付かされる。

「あんまり考えなくていいよ。別に停学なんて、どうってことない。兄貴もよくくらってたし。こつて、そーゆーところでしょ？ 今更、期待してない。あんたもさ、ホントさっさと忘れっちまえよこんなこと」

飄々（ひょうひょう）と屈託なく笑う朋日は、藤森の目にはなにか吹っ切れた様にも映った。

「里丘カツコイー。」

感嘆の声が洩れる。

藤森に笑顔が戻った。

「いよっ！ 男前！」

「誰が男だ！」

ばかりと拳骨をくらった藤森が痛えーと大げさに喚いている。本気で誉めたつもりだったのに。とすねた口調の藤森に、朋日は笑顔で額にイカリマークを浮かべた。

——男前という言葉が女性にとって誉め言葉になるかあ！

「つたく、すぐ調子に乗る」

思わず脱力し、呆れたように肩をすくめた。

「正直なところ、悪いことしたなあって思ってたんだよ」

口を開く朋日を藤森が見つめる。

ばつが悪そうに目を逸らすと、言葉を続けようとした朋日の声を遮るように享日の声が玄関から聞こえた。

「たっただいまー。帰ったぞー」

「あちゃー、帰ってきたか。藤森、見つかると思われなくなるぞ」

「親父？」

「兄貴」

「……いや、この際だからきちんと謝っとく」

現われた享日は上下を黒のレザーで包み、薄く色の入ったグラサンをかけ、指きりタイプのこれまた黒の皮手袋をはめていた。いかにもパチンコしてきましたといわんばかりの茶色い紙袋を抱えてさえいなければ、相当いい男の部類に入るはずなのに。

紙袋をおろし、レザージャケットの前を開く。暖かくした部屋の中では暑いのだろう。白のプリントTシャツにお気に入りのチヨーカーが見える。髪は全体的に金髪だが部分的に黒いメッシュが入っていた。パツと見、バンドでもやっているのかと思わせる風体だ。

そこで、居間にいる妹と見知らぬ男に気付き首を傾げた。

「朋日、そいつ誰？」

親指で藤森をさして訊いてくる。

「ガツコの友達^{タチ}。藤森」

「おー」

満面の笑みでずかずかと藤森に近寄ると、ガツシと手を取り上下に振り回す。

「妹が世話になってるな。よしっ、飯でも食いに行くか」

時計の針はまだ十一時を半分過ぎたあたりだというのに、脈絡のない台詞を吐く享日に目を白黒させつつ、藤森はおずおずと頭を下げた。

「すみませんでした」

「なにが」

享日がきょとんと問い返してくる。

「里丘の停学。俺のせいなんです」

享日が朋日に疑問の目を向ける。

昨夜、遅く帰った享日に、居間でくつろいでいた朋日は『明日から休みになった』と言っただけだった。

やけにさっぱりした口調だったので、朝の心配が杞憂きゆうに終わったことに胸を撫で下ろしていたのだが、どうやらさっぱりしたのには理由わけがあつたらしい。

朋日はゆっくり首を振る。

「違うよ。藤森のせいじゃない」

「でも、」

「違う」

藤森がきっぱり言い切る朋日に戸惑っていると、朋日が言い難にくそうに言葉を続けた。

「さっきの話の続き。…ちょっと別のことで苛々してて、彼女達の行動が引き金にはなったのは事実だけどさ。…八割くらい、私自身の問題なんだよね」

「…八割？」

昨日アレだけ暴れておいて八割は自分自身の問題が原因だと言い切る朋日に呆気にとられて藤森が問うのに。

「そう」

朋日は短く肯定を示す。

「つまり、」

ゴクリと喉が鳴る。

もしかして、まさか、と思いつつも藤森の頭には妙な仮説が閃いた。

里丘が言いたいのは、八割の何らかの問題を抱えていた彼女ともかに小泉達の口撃くげきともいえる負荷が二割掛かり、さらに昨日のことが引き金となり大爆発に及んだ、と。

恐ろしい。

自分で考えておいて恐ろしい想像に脂汗が浮き上がる。

彼女達が可哀相過ぎる。

それじゃ、とんだ。。。。。。じゃないか。

敢えて伏字にしてはみたものの。

「八つ当たりってことだな」

話の流れで薄々察した享日が横からまとめるのに朋日が頷く。藤
森の顎がガクーンと落ちた。

当ったり〜 パッパラパ〜

頭の上で天使が高らかにラッパを吹き鳴らしている。

「まあ、仕方ねえよな。気に病むな少年」

高らかに笑う享日の声が遠くに聞こえた。

【11 決意】（前書き）

朋日の口から語られる決意。

【11 決意】

藤森は茫然自失の体で車に放り込まれ、連れてこられた店でもんじや焼きを食べていた。

朋日と藤森が並んで座り、享日は朋日の向かいに座った。

藤森と享日がへらを使って食べ始めたのに対し、朋日はへらを皿に置き享日を見据えている。

「食わないのか？」

るるんとへらを口に運んでいた享日が食べようとしない妹を不思議顔で見た。

「亨兄、来期から私も参戦する」

「おまつ、はえーよ」

「早くなんかない！ こんな長い休暇初めてだ。いい加減…つかれる」

「????」

来期だの、参戦だのという突然の話の展開についていけないでいる藤森は口を挟めないでいた。ただ、戸惑ったようにもんじゃ用のへらを咥えて二人の会話を聞いていた。

「あいつらだつてとづくに始めてる。私だけこんなところでのんびりできないよ。親父や母さんには悪いけど、どだいムリな話なんだ。亨兄だつてわかつてるでしょ、ここは私の国じゃない、この国を故郷だなんて思えない。私はあそこで生まれた。帰る場所はそこにしかない」

「朋日」

本気か？ と享日が窺うようにみてるのに、朋日は苦い笑いを浮かべた。

「ここにいて私が学べることなんて無いよ。こんなことになんの意味があるの？ そりゃ、親父や享日兄には、思い出の場所かも知れないよ。一生の友達ができて楽しい事一杯で、でも私には…わからないよ。」

ない。学校なんてまともに通ったことないのに、今更学生なんてやれないよ。ホント、いまさら過ぎて…」

俯く朋日。

深刻になりそうな空気を享日が笑い飛ばした。

「お前が決めたんならそれでいい。俺や親父が何を言おうと、そんなもん選択肢の一つに過ぎねーよ。選ぶのはお前だ。だろ？」

茶目つ気たつぷりに笑う享日に朋日も顔を上げ、力強く頷いた。

帰りの車中。満たされた胃をおさえ藤森は後部座席に収まっていた。

「ご馳走さまでした」

「いやいや。俺が奢りたかったんだし、今日は懐もぬくいから気にするな」

腹が膨れて上機嫌の享日が言うのに、そういえば、と藤森が尋ねた。

「パチンコですか？」

「いや、スロット」

にこやかに返す享日に藤森はほえーと感心の声をもらすが妹・朋日は冷めた目で呟いた。

「…詐欺だ」

享日が慌てて助手席に座る朋日に言う。

「兄ちゃんに向かつて詐欺はねーだろ」

「だって、数字見えてるんでしょ。自分の動体視力わかっててやってんじゃん」

「数字が見えるんですか」

「あ」

詐欺だーとジーツと視線を注ぐ朋日と、まさか、と驚く藤森の視線をかわすようにスイーツと窓の外に視線を飛ばした。

次いで、はっはっはと笑って、うやむやにしまおうという意図がバレバレな乾いた笑い声をたてた。

「笑って誤魔化すな」

「イテッ」

軽いパンチが享日の頬を叩いた。

「謹慎とけたら、これ出してくる」

シャワーを浴びてさっぱりした様子の朋日が白い封筒を享日の目の前に置く。

「俺も行くぞ」

缶ビールを片手に天気予報を聞いていた享日が言つのに朋日が戸惑いの声を出す。

「えっ？」

「なんだよ。俺だって一応ここではお前の保護者だぞ。最後のお勤めだ」

朋日の濡れた髪をくしゃっとかき混ぜて享日が笑う。

俯いた朋日の表情は見えない。

「サンキュー、亨兄」

言った朋日の声が、少し震えた。

【12 最後の日】（前書き）

出会有あるから、別れがある。それは突然にやってきた。

【12 最後の日】

「お世話になりました」

朋日の謹慎が解けるその日、藤森は日直だった。

それは、運命の神様からのちよつとしたプレゼントだったのかもしれない。そう思えるような偶然。

朝のSHRで配られたアンケート調査のプリントを集め、職員室へと持ってきた藤森は目を瞠るような光景に出くわした。

職員室から出てきた少女はライダースーツに身を包み、腰まであるうかという長い髪が乱れるのも気にせず深々と頭を下げている。

その髪は見事なまでの金色。

交換留学生が学年に一人はいるし、街には驚くほど異国の人間が溢れている。外国人が珍しいというわけではないが、目の前で外国人特有の訛りなまもない綺麗な日本語で、丁寧にお辞儀をしている外国人、というのは目を瞠るものがある。

なにより、声に覚えがあった。

ぱつと頭を上げた顔の造作ぞうさくは見覚えようがない。

くるつと向きを変えた少女とばかり目が合った。

瞳の色まで、見知ったそれとは違う。

真つ青な空をそのまま切り取ってはめ込んだように晴れやかなブルーの瞳は、色を変えても意志の強さが窺うかがえる。なによりも、彼女のいまの気持ち素直に表わしているようだった。

その瞳を、自分はよく知っている。

破顔一笑。

惜しげもなくこぼれんばかりの笑顔で少女は藤森に笑いかけてくる。その笑みは人に向けられるものの中でも、特に親しい人間にむけられる笑顔だった。

はつと我にかえる。

「里丘!？」

藤森の口から叫びにも似た驚愕きょつがくの声があがる。

「藤森。会えるとは思わなかった」

少女は近づいてくるといつそ清々すがすがしいまでの笑顔で話し掛けてくる。もしかして他人の空似？ などという疑いを挟む隙もない、間違いない。朋日だ。呆氣に取られて藤森が呆然とみつめる。

「どうしたんだよ、…その髪、目も」

藤森が言うのに、朋日はついつと頬にかかる金色の髪を見やって人房摘み上げる。

「自前だよ」

いまは青い瞳に、悪戯っぽい色を浮かべている。

「ほら。私ね、帰るんだ。自分の在るべき場所ホームに。そのために今、辞めてきた」

あつさり告げられた言葉に息を飲む。

「辞めた、って」

戸惑う藤森に、はにかむような少し困ったカンジの笑いが朋日からもれる。

「お別れだ」

朋日の言葉に、意味を成さなかった言葉がつながっていく。

『時期的には良かった』

『ここは私の国じゃない、この国を故郷だなんて思えない』

『今更学生なんて』

『帰る場所はあるにしかない』

まさか、こんな結末が待っているとは予想だになかった。言葉が、声が出ない。

何を言えればいい？

謝罪の言葉？

そんなもの彼女は求めていない。怒っているわけでもないのに、謝られても彼女はそんなもの受け取らない。

別れの挨拶？

急すぎて、実感できてさえいないのに、笑ってバイバイなんて言えるはずがない。

どうして辞めるのか、問い質す？

それはもう知っている。多分。

漠然とにすぎないが、彼女がココを必要としていないことはわかったつもりだ。

決して逃げ出すわけじゃないことも。

女子生徒らとのいざこざも、彼女ともかにしてみれば「面倒事」の一言で済むような些細な問題でしかないことも。

引きとめることは、出来ない。

なにか言おうとして、言葉が別の想いに押し流される。どれも正しいようで、どれも違う。

藤森の葛藤かつとうを察した朋日が藤森の胸にとん、と軽く拳をあてた。

驚いて朋日を見ると、泣き笑いのような表情で藤森を見ていた。

その瞳に映る自分は、今にも泣き出しそうな情けない顔になっていた。

「なんて顔してんの。朋日様のさいっこの門出かどでにケチつけんじゃねーよ」

ニヤリと口角を上げ、いつもと変わらぬ朋日の物言いに、藤森の頬が弛ゆるむ。

彼女は決めたのだ。

ココを出て行くことを。

前進することを。

彼女にとってここはもう過去のことだと、わりきって。

「じゃあね」

とびっきりの笑顔で手を振ると、振り返りもせず学校を後にした。

校内では午前の授業が始まろうとしていた。

一限目の教師が来るまでの時間を、生徒たちは面々に過ごしていた。

教室の中の大多数が、ふいに上を見上げた。

「上の教室、騒がしくないか」

突如、上階から聞こえてきたどよめきに驚いたのだ。窓際に居た生徒たちは開いた窓から飛び込んでくる上の教室からの驚愕の声を、かなりの大音量で聞くこととなった。

次第に真上の階の騒ぎがそのまま隣の教室に伝染したかのように広がっていく。

数人がベランダに出て上を見ると、上の階のベランダから何本もの腕がどこかを目掛けて指差している。自分達の教室の上だけじゃない。見る限り上階の全ての教室のベランダから腕が出ている。UFOか？と体を逸らして空を眺めても何も無い。

もう一度指差す先を確認すると、それはどうやら校門の方をさしているらしい。

振り返ってそれをみた生徒たちは「…うそだろ」「マジ…かよ」「ホントに！」「本物！？」と口々に驚愕と疑念の言葉をのぼらせた。

上の階でも全く同様の騒ぎが起こっていた。

呼応するかのようにそれは漣さざなみの如く、上の階から下の階へと広がっていく。

「外、見てみるよ」

「うわっ、ど派手！」

「サトカ SATOKAのマシンだ！」

興奮気味にベランダから身を乗り出した生徒の横では、呆然とその光景を見下ろす生徒もいる。

「SATOKAだ……」

「わかってるよ」

みたらわかると興奮気味な生徒が言えば、呆然としていた生徒が憤然と言い返す。

「違うつて！ みろよあのマシン、車体に走るゴールドとブルーのライン！ 女神の絵！ SATOKAの文字！」

「だから、SATOKAだろ」

勢いに気圧^{けお}されるように確認してくる男に、今度は呆然としていた生徒のほうが興奮気味に返した。

「お前が言ってるのは車の方だろ！ その隣をちゃんと見ろつて、あれつてほら、去年バイクの世界レースで優勝して突然姿消したつていう。…あれじゃないのか！？」

言われた生徒が車の横のバイクに目を向ける。

遠目でよくは見えないが、白いボディにラインが二本、そして、カウリングにはチームマークである女神が描かれている。

「SATOKA？ あの！？」

「そうだよ！」

「まさか？」

苦笑をはらんだ顔からぎこちなく笑みが抜け落ちていく。

「本物じゃないだろ、いくらなんでも」

力なく呟き声になるそれには、こんなところにいるわけないだろ、という想いが含まれていた。

「チャンプだぞ、世界タイトル持つてるSATOKAのマシン…な、わけない…じゃん？」

しかし、見れば見るほどそんな気がしてくる。

昨年の暮れ、何度も見た映像を思い浮かべる。

確かに、白いボディに特徴的なラインが二本、チームを象徴する女神のマークは記憶の中の映像と同じ様な気がする。

「SATOKAの本物のレーサーがいんのに、あのバイクだけ偽物？ その方が変じゃねー！？」

バイクと同じペイントの施された車の横に立つ男の姿を、食い入るように見つめる。

ゴクリと喉が鳴った。

髪は全体的に金髪だが、部分的に黒いメッシュが入った男。色の濃いサングラスを掛けているので顔までは見えないが、ファンならすぐに気付くその容姿。いや、ファンでなくとも誰もが一度は目にしたことがあるはずだ。

瞳に浮かぶのは、憧れと羨望。

そう、少年ならば一度は見たことがある夢を実現してのけた男だ。世界で20人という狭き門をくぐり、一握りの人間だけに許された栄誉を手にした男。

ざわめきは収まるどころか、一層の騒ぎを巻き起こしていた。

「そっぴや、いま…停学になってる女子、いたよな」

「ああ、里丘だろ」

「…名前、…なんだっけ」

「確か、里丘…：朋曰…」

訊いた生徒と訊かれた生徒が弾かれたように顔を見合わせる。

その表情はあつと驚きに染まった。

そしてまた、窓の外に目を向ける。

「あの人は!？」

「里丘亨曰!…ウソだろ」

その時、校舎のほうから現われた人影に、全生徒の目が奪われることとなった。

長い金髪を風になびかせ、颯爽と校門に向かって真っ直ぐに歩いていく。

里丘朋曰、その人だ。

チームSATOKAのメインレーサー。

何度も見ていたはずの文字『TOMOKA SATOKA』。

昨年のバイク界での大事件だった。

当時、弱冠十五歳の少女が世界レースの優勝者となったニュースは世界を駆け巡った。

並みいる強豪を圧倒してのレース運びに、世界の評論家達も惜しめない賞賛を送った。メディアが放っておくわけがなく、日本でも大々的に報道された。

ただし、未成年であることを理由に、私生活が報道されることは無かった。

その彼女が、まさか自分達の学校で、共に学生生活を送っていたとは誰も夢にも思わなかったわけである。

「享兄、…やりすぎ」

「だ〜いじょうぶ。俺のほうはペイントだけだから」
そっという問題じゃないだろ。

グツと親指を突き出してニツと笑う享日に朋日が肩をすくめて苦笑する。

後ろを振り返るのが怖い。先ほどからの大騒ぎがこの二人に聞こえていないはずが無いわけで。

特に享日のほうはそれを楽しんでいる節があるから、手におえない。
い。

「帰るか」

「うん、帰ろう!」

空は青く晴れ渡り、秋風が優しく二人を送り出した。

【13 回帰】（前書き）

エピソード

【13 回帰】

場内は、興奮の坩堝るつぼと化していた。

その渦の中心にいるのは十七歳の少女。

彼女はいま、自分の分身ともいべき白いマシンを駆かり、戦いの最中さなかに存在いた。

コーナーを抜けスロットルをあげると、それに応えてマシンが唸うなりをあげる。

熱気にあてられたアナウンサーが興奮気味にマイクをとり、唾を飛ばした。

「帰って来ました！ SATOKAのレーサー里丘朋日！ 父はあの一世、そして記憶にも新しいことでしょう、兄は先日さきのF1グランプリで今期初の優勝を手にした亨日。彼女自身、一昨年彗星のようにデビューを果たし、世界の頂点まで昇りつめた実績をもっております。練習中の怪我により、今期の復帰も危ぶまれた彼女ではありませんが、万全の体調で戻って参りました。彼女の走りをご覧下さい。他を寄せ付けない速さ！ 強い！ そして今、トップの位置をキープしたまま、ファイナルラップにはいったー！ー！！」

勢いよくチェッカーフラッグが振られる。

場内の熱気は収まることを知らず、昂ぶる一方だ。

溢れんばかりの称賛が、ウィニングランで手を振る少女に送られる。

風を感じる。

この瞬間、生きているという事を実感できる。

震えがくるほどの興奮、緊張感、そして走れる事の悦び。

これほどの悦びを感じる事が出来る場所は、他にはない。

これが私の、^{ホム}存在理由。

【13 回帰】（後書き）

ご拝読ありがとうございました。

最後まで読んでいただき、感謝！感激！雨あられ！！でございます。

拙い文章では、お伝えできなかった点多々あります。

ちよろつと出てきただけの柳先輩しかり、紀田しかり、松宮しかり、何のために出てきたんだと座布団を投げられそうです。怖いです。

最後の最後に登場人物の紹介というのもなのですが、先に書いてしまつと話の先まで読まれてしまいそうだったので、ここに書いておきます。

一応、主要メンバー（？）のみ。

里丘 朋日 さとおか ともか

主人公。高校一年。

【裏設定】 小説内ではあまり出てこないが、実は…という裏側。バイクレース・チーム『SATOKA』のレーサー。

父・一成：元F1ドライバ―。

兄・享日：現役F1ドライバ―。

母・シエリー：元モデル。

里丘 享日 さとおか きょうか

朋日の兄。朋日とは五つ違い。

【裏設定】 小説内ではあまり出てこないが、実は…という裏側。

現役F1ドライバ―。朋日の兄。

藤森 怜 ふじもり さとし

高校一年。成績は中の下。男女共に気安く接するため、人気度は高い。同じクラスの飯田が好き。

松宮 まつみや 双葉 ふたば

里丘兄弟の幼馴染。朋日の通う学校の化学教師。享日と二つ違い。

【裏設定】 小説内ではあまり出てこないが、実は…という裏側。享日に道ならぬ想いを抱いている。

紀田 きた

高校一年。なんだか朋日が気にはなるが、気になる理由が恋心であるかは不明。

柳 やなぎ

高校三年。化学部の部長。受験生であるにも拘らず、妖しい実験を行っては得体の知れないもの生成しようと励んでいる。

あとがき

この話は、F1にもバイクレースにも詳しくない南杜憂狩が書いております。

世界という大きな相手と戦う少女が、もしも普通に高校生活を送ることになったら？

の疑問に、こんなカンジだったら面白いかな〜と軽い気持ちで書き始めた為、「12 最後の日」を書くにあたり、F1に詳しい友人に知恵をお借りしたのですが。。。どうも、やってはいけないことをやってしまった感が拭えません。（汗）

F1のオフが11月〜2月くらいと聞いて、話を書いた後で「おお、享日、帰ってもおかしくないじゃ〜ん」などと思ってしまうあたり、F1のファンの方に聞かれたら殴られそうです。

とにもかくにも、「里丘朋日の非日常」はこれにて終了です。
今後の話を書く予定は未定です。

これ以前の話を書くこうにも知識が足りません。

この小説内の修正・加筆を行うことはあると思いますが…。

それでは、またどこかでお会いしましょう。

南杜 憂狩

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6293e/>

里丘朋日の非日常

2010年10月8日15時05分発行